

319

337



始



エト3K-82

319-337



著

き

士

官

八

全

陸軍歩兵中佐 石浦謙二郎序
陸軍歩兵中尉 石井淳著

東京 兵事雜誌社

大正
3.11.16
内交

序

青年將校ノ修養ニ關シ記述ヲ試ミタル書籍ノ刊行セラレタルモノ汗牛充棟モ啻ナラス、然レトモ、或ハ精神修養ニ、或ハ隊附勤務ニ、或ハ戰術研究ニ、何レモ部局ニ限レル著作其大部分ヲ占メ、廣ク一般ノ修養ニ亘リ、而カモ新時代ノ面目ヲ窺フヘキ諸點ニ言及セルモノ多カラサルハ、識者ノ竊カニ遺憾トスル所ナリ。

頃日石井中尉、公務ノ餘暇ヲ以テ、此種ノ着眼ニ基キ、平日ノ所懷ヲ録シテ一冊子ヲ成セリ、題シテ「若キ士官ヘ」ト謂フ、蓋シ其意中少尉諸子ノ伴侶タラシメントスルニアルモノ、如シ、而シテ論說縱橫、修養ノ本義ヲ闡明シ、現代士官ノ缺陷ヲ指摘シ、或ハ勸メ或ハ戒メ、

擒縦自在ナルモノアリ、然レトモ論旨往々激越ニシテ理想ニ走ルノ嫌アリ、或ハ又所説俄カニ首肯シ得サルノ憾ミナキニアラス、即切言スレハ、予ハ此書ニ全然賛同ノ意ヲ表スルモノニモアラス、且之ヲ以テ直ニ實行上ノ指針ヲ得タルモノトハ過信セス、只夫レ中尉ノ研究及抱負ノ精且大ニシテ、孜々トシテ已マサルノ態度ニ至ツテハ人ヲシテ期セスシテ感動セシムルモノアリ、此意味ニ於テ、本書カ研究ノ一方面トシテ見ルヘキ價値アルコトヲ認メサルヲ得サルナリ。

中尉ノ請ヲ容レ、敢テ一言ヲ卷首ニ辯ス。

大正三年十月

陸軍歩兵中佐 石浦謙二郎

自序

□奉公の人、何れも蹇々として、匪躬の勞に就かざるなし、殊に軍務に携はるものは、繁忙にして勞苦多く、而も敢て厭はざること比々咸然り。予は、此書を介して、畏敬し親愛する諸彦に見ゆるに方り、先づ、諸彦の武健を祝し、勤勞を多とせずんばあらざるなり。

□此書題して「若き士官へ」と謂ふ。若き士官へ教ふるの意にあらずして、此書を以て御話相手たるべく、若き士官の膝下に差遣はすの義なり、否、寧ろ教を受けむが爲め罷出でしむるものなり。諸彦果して温容慈顔、而も胸襟を披いて引見せらるゝや否や。

□御話相手たるにも、始めより單に諸彦に合槌打たんことを期せず、

教を受くるにも只管低頭して黙つて行くやり方は致さず、夫相應の用意を以て罷出づるなり、故に第一に苦言あり、第二に相談あり、第三に世間話あり、其他笑話の面白きもなきにあらざれども、或は往々全くの無駄話もあるべし。是等は皆諸彦の取りやうに俟つべく、なるべくは然るべく意味を咀嚼され、何とか御返詞あらんことを希ふなり。

□多忙なるは吾人平生の常態なり。予が此書を成す、公務の餘暇秃筆を呵すること十數夜、已むを得ず五更に至れることもありき、而も、身固より文字に爛はず、晦澁の筆、散漫の想、往々自棄して手を投じたること幾回なるを知らず、然れども銳意自奮、遂に短兵急なる作業を終る。それ眇たる一冊子のみ、何の力作を要するものぞ。

□然りと雖も、此書を草せむとする志は既に數年前より立てりき、隨

者の眞摯なる態度を見る、殊に華やかなる緋緘の鎧を以てする勇ましき初陣の心をこれに應へん人はたゞに若き士官のみではあるまい、若き者の共通な暖かみと詩とを有つ總ての人は皆これを聞かうとするであらう。

著者の知己を楽しむ弟は、著者が弟を熱愛する心の一部の現はれとして、この書を弟に與へられたことを心から感謝してゐる、この感謝は、やがて、著者と著者と語らるゝ讀者の、永き若い日の幸あらんことを祈る心たらざるを得ぬ。

求めらるゝまゝにあまへて識す。

在東京醫科大學 十 樂 子

壯士按劍漫自許

馬革裹尸男兒常

多憂書生問文章

還論事務向廟堂

如是而死於吾足

直諫先着第一槍

松 露

弟 よ り

—— 家兄の著書のために ——

世が進んで、普通の意味に於ける不自由なるものを感じなくなる、人が利口になる、何處へ行つても氣持よく應對される、丁度、油に富んだ車輪が音もなく軸のまはりに回轉するやうにやつて行ける、今世人は幸なる哉。

殊に若い者は天然の寵兒とも云ふべく、つまらぬ過去の執着を持つ年寄と違ひ、何處までも若い特權を伸張し得る、大手を振つて歩むとは、若者の自然なる心の擴がりと思はれるではないか。

併し滑らかに進むものは眞髓に觸れない、深く味はふとするならば、やはり起伏ある道を選ばねばならぬ、宛かも平原を汽車で走るより、七寸の鞋で山河を跋渉するが如くに、そして、努力に對する愉快を得得るものであつて欲しい。

事實を有りの儘に云へば、それは皮肉であるといふ世の中は、若い者の生くるに好ましからぬものである。

拳の先きで釣鐘をつく、はじめは何の反應こたへもない、段々ど撞き続ける中に、いつか鐘はうなり初むる、つけばつく程、鐘は眞の響を發する、若い者の各自は何れもその眞の響に接しやうと考へてゐるのである。

若い血のたぎりに震えんとしつゝある心は、更にその眞の響と眞の響との共鳴を得んことを求める、求めて求むる中に、若き者が生くる命脈波動があるので、扱その共鳴を感じた時のうれしさは格別であり、次いで奮起心が湧き緊張せる氣分が成立する、かくて共鳴の音波の工合により、茲にすべてが與へられ、すべてが達せられやう。

眞に震える若き心、何者か其處に能くオーソリチイを有すべきものぞ、只其處にあり得るものは事實其物であり、心その物である。

私は此書で、少なくとも、若き人を求めて共に俱に心の響を聽かんとする著

つて内容に至りては、一朝一夕の思付き、片々たる偶感にあらざることを明言す、而して短兵急の作業を以て其意を現さんとす、遺憾なきを得べけんや、蓋し一に已むを得ざるなり、諸彦の諒を請ふ所以なり。

□若し夫れ、若き士官にあらざる老練の士の清鑒を得て、あべこべに、若き士官たる予を憐まれ、敢て啓發する所あらしめられなば、望外の幸なり。更に此書を以て一途に生意氣なりと却けらるゝ人に對しては、一度憤怒を抑へて、徐ろに、合理的、具體的なる三尺の痛棒を下されんことを願はずんばあらず。

□今や歐洲は暗澹たる戰雲に蔽はれ、東洋の局面亦漸く多事ならんとす、近き將來に於ける機運の勃興は、到底吾人をして晏如たらしめざるべし、心ある人が此書を読み、反省し、更に熟考し、新らしき研

鑽、深き攻究に従事し、軍國に貢獻せんとするの奮起心を湧起さるゝ、
動機ともならば、是邦家の幸福なり。

□予や鶩鈍、素逸足の材にあらず、然れども努めて已まざるの意志に
於ては人後に落ちざるべきを期す、特に此書を完稿して自ら欺かさ
んとするの感切なり、幸に驥尾に附するを得んか。

——大正三年十月——

若き士官へ目次

若き日の影……………	(一)頁
華手な者—世表の外—體のよい評語—情性。	
呑氣と稚氣と横着と……………	(五)
清淨境—呑氣は無頓着—稚氣滿幅—險呑千萬—情實のな い人—無常識—國民の儀表—嗜み—品格—輕き横着。	
隊附將校と官衙附將校……………	(一三)
初年兵教官たるの快—教育者の天分—進歩主義—教育上 の唯心論—訓練と精神—隊附將校の特性—武士道の本義 —統御の根基—恬然たる古參將校—將校の色分—大學 準備—官衙附將校の役徳—榮達—兩者の提携。	
若き者の權威……………	(二四)
洋々たる前途—試み—權威—研究の態度—卒直なる心理 —所謂青年將校—天賦の舞臺。	

若き者の弱點……………(三〇)
怯——面會人——地方と軍隊との連繫——在郷將校——小自我心——常識——啓發録。

信 念……………(三五)
俗物——人は恐るべきにあらず信念は長るべし——清正の信念——自得——教育の効果——心外無別法——辻説法——道德の基準——質素論——國體觀——松陰の意氣込。

希望と抱負……………(四九)
精神的寂滅——小さい希望——確かなる意義——自助の根本義——用意——法華經。

満足と安心……………(五一)
美はしき自覺——靜止——意志——感情——理想と現實——自己没却——壓制——不動如山——名譽——天命——鬼神避之。

新時代の修養……………(五八)
親譲りの財産——軍隊の眞價——出藍の譽——進展の機運——淵源深し——暗示——時代の進歩——流行性——當然の責任——常識と學究——常識判斷——不文の歴史と形式——平凡主義——突飛と常識化——組織的科學的——つまらぬ力痛——憲法と民法——

——生存込み。

葉 櫻 影……………(七一)
單刀直入——教育と心理——外貌で判る——親切——聽覺機能の不長——自然の音樂。

支那語研究案……………(七九)
武士の心事——軍人の包圍——筆談——一矢酬ゆ——沈吟——痛切に感じた——支那時文——最近戰亂に對する覺悟——前途遠遠——茲十年の後——妙な制度——方案。

廣く眼を地方に放て……………(八六)
廣い意味——地方の傾向——根本的の詮議——一面の理——妥當なる方法——風潮の起因——憲政思想と時代觀念——生活雜——軍隊へ注文——一知半解——社會政策——平和主義——勢力及影響——遺物——杜撰な廣言——禮儀。

戰爭と國民思想……………(九三)
平和主義——勢力及影響——遺物——杜撰な廣言——禮儀

趣味と社交……………(一〇一)
別問題——趣味の低下——生活の意義——利害——理性的趣味——

—讀書—自然の欲求。

雨を得るの記……………(一〇七)

文備—娛樂—美はしい餘裕—見識—苦しい負惜み—赤兒
千載の知己—訪問。

淡的生活……………(一一六)

純なる氣分—〇〇藏書—淡的の眞味—吾人の誇り—動中
の靜—日露戰役の勝因の——其戰手—リエージュ攻圍—
—剛健の氣風—武士家庭—粹々たる餘裕—向上不退轉。

陸と海……………(一二三)

壓迫—偏狹と潤達—外來人に對する便宜—深き研究家—
—陸軍の利那主義。

少年行……………(一二八)

御嶽の秋—親しき仲—好個の食卓—得難い土産—野外の
遠足—心身の鍛練。

結婚問題……………(一三四)

士人の家庭—組織的研究—養子縁組—合理的のやり方。

從卒……………(一四一)

將校の分別—誤用—精神的謝意—將校内面の暴露—從卒
の心理—依怙の沙汰—至高至美。

軍神の詩歌……………(一四七)

乃木將軍の詩歌—橋中佐の歌—廣瀬中佐の詩—嚴かなる
或もの。

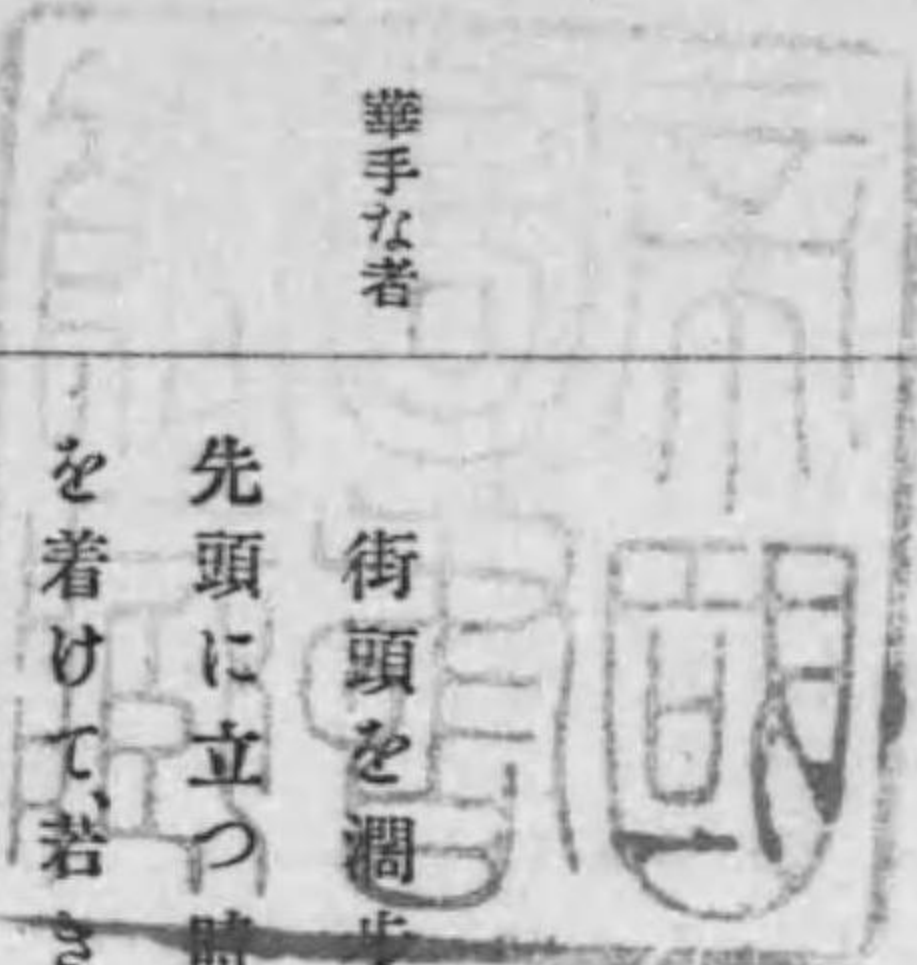
若き士官へ目次終

書中の真意は、通り一遍の讀方で判るものではない、願くば二讀、三讀して戴きたい。
 此書、各頁の上面にかなり餘白を存してあるのは、讀者が氣附次第に所感を記入せらるべき便宜さと思つてのこゝみである。

若き士官へ

陸軍歩兵中尉 石 井 淳 著

若き日の影



華手な者

街頭を闊歩する時、練兵場裡、下士兵卒の圍繞まじりの中に佇立する時、行軍縦隊の先頭に立つ時、其反り返れる胸と燦として輝き、又鏘々として聲をなす刀に眼を着けて、若き士官を看る者は、常に軍人好きの小供のみではあるまい。
 若き士官の銜氣に満てる眼差、力味勝ちの姿勢は、やがて名譽ある軍人の青春時代を表象するものではなからうか、アレは將校だ、偶には大將だ、目の之に映するや否や直に下す世間の讚辭は、身に取つて當然とは云ひながら、又夫

れ以外、異様の誇りを濠はせつゝある若き士官の身の上こそ、中々に華手なものと謂ふべきである。

小學校の教員、小役人、學生の途行く姿の憫れさよ、當の學校の所謂先生丈には御辭儀をする生徒も、他の學校の教員には振返りもせぬ、生徒は先生々々と仰ぐが父兄は蔭で、何の高が小學教員がと蔑すむ、腰辨連中の面貌は粗食の爲めに貧血の見すばらしさを示して、些の生氣を認め得ぬ、學生は強度な近視の眼を怪しげに光らせつゝ、疲れたる腦裡に尙ほ何事かを索めて、懊惱して居る。此等を社會の弱者として、白眼に見る若き士官の態度は稍々傲慢に近い、若くして高等官の列に入り、貧乏少尉、ヤリクリ中尉の稱はあるもの、優に中流の身分である、若い士官は勢ひ社會の營々たる外に、佗然として自適してゐる譯である、有難い次第ではないか。

軍人は淡泊でよい、元氣があつてよい、體格が如何にも立派だ、とは一般通俗の評語である、餘りによいもの、ヅクメである、又實際若き士官のキビしくした

軍人けりこころい
しんじんこころい
は

若き士官の身振り

身振りを見るも愉快である。

若き士官よ、運命の寵兒たる者よ、將校の本領を守れりと自信し、國民の儀表を以て任ずる者よ、汝の眼に入る社會は、汝の淡々たる頭腦に映じて、與し易きものと平たく考へてゐるのである、實に超然として世の俗態の外に立つてゐる若き士官の心こそ、屈托もなく、只新鋭なる元氣の源泉である、軍人の華である、實を結ぶには餘りに早き咲きかけの花である、若き士官よ、永遠に老ゆる勿れ、併しながら御山の大将は乃公一人と思ふと飛んでもないことになるのである。

少しく思慮ある紳士、少しく高等の教育を受けた學生は、若き士官を如何に見つゝあるかは、殆んど想像以外であらう、特に近來の世態からして、然々容易く若き士官をあがめぬことを知らねばならぬ。淡泊でよいとの半面は、單簡低級を意味し、元氣があるとは粗野との反言であり、體格が立派だとはズー體許りとの偶意である。

醒めよ、醒めよ、若き士官。

頭こなしに若き士官を責めるのは無理であるかも知れぬ。

若き士官には氣が附かぬ事だらけなのである。又若い間は或る處迄夫れでよいのであるが、一方から考へると、人間、惰性程恐ろしいものはない。惰性の中に退化が來ること、溜り水が腐ること一般である。

故に若き日の影としての士官には、同情を寄すべきである、鞭撻を加ふべきである、刺戟を與ふべきである、之を顧みざるに至つては、甚だ心外である。

若き經驗を味つて見て、吾ながら不満足であることは、誰も同様であらう、心あるものは不満足を醫すべく、何とか煩悶焦慮してゐるのが當然であらう。

研究、修養の道はいくらでもあるのであるが、扱、之が発見され難いのである、先輩は宜しく若き士官を指導すべきも、若き士官も亦常に自ら心掛けねばならぬ。

將校團教育は改正教育令の下に行はれつゝあること勿論であるが、將校の

欠

欠

中隊附將校と官衙附將校

初年兵教
官たるの
快

怪訝な顔に稍々悲觀の色を浮べた、種々の服装の若者を受領して、型の如く軍服に着更へさせ、扱附添人と對ひ合せに並べて中隊長から一場の御話がある要するに引受けたから御安心なされいと聞いて、中隊長の顔を拜まぬばかりに、何分宜しく御願致しますと叩頭して、附添人は風呂敷包を抱へて引取る。夫からは全く中隊の新兵さん、否、初年兵だ、而も中隊長の意圖を受ける初年兵の教官は、責任上全く自分の弟か子の様に思ふ、日一日育て掛つて見る内に、色々な滑稽は演出される、入營當初の悲觀的な顔色は全く無邪氣な兵隊さんの氣分と變つて來る、教官は一種の樂みを以て午前午後の稽古を指導する、熱心の度は自分ながら可笑しい程に高まる、随つて人に一本の指でも指されると若干不快な念さへ起る。

噫、初年兵教官たるの經驗を嘗めた者は、誰しも斯の如き愉快なる思出を有

たぬはなからう初年兵の教官として愉快を感せず自らなる熱心な氣を起さぬものは中隊附將校中隊長の分身者たる資格はないのである。

教育者の天分なるものに觸れた氣高い觀念は中隊附將校が初年兵教育と共に自然に享受するのである是れ正に教官たるの第一歩である。

出でゝは武技を教へ入りては内務の躰をなし事々物々毎に軍人精神を注入して凡ての動作と契合せしめ樂しき中隊家庭の人として起居に馴らせる教官の苦心は中々言語に盡せるものではない。

昔の蠻的教育は跡を絶つた兵卒家庭との連絡も附ける教育令も後れ馳せながら改正される確に軍隊教育の進歩である然るに或者は軍隊も近頃一種の軟教育に陥つたと論ずるものがある吾人は必しも然うは認めぬ教育の型式としては常に進歩せる方法手段を取らねばならぬ空しく舊慣を保守して居らずに進歩主義でなくてはならぬ其一方精神に至つては古往今來替るべからざる問題であつて實に中隊長以下幹部の抱負に俟つ無形の感化有形上

の指導が凡ての行事に磅礴して居らねばならぬ教育其者の主義に至つては既に歐式模倣時代を過ぎて日本國體觀を根抵とし之に國民性を經緯した所に其立脚地を置くやうになつたのは實に軍隊教育の一新紀元を作つたものであらう。

教育學上の立場から言うても近來學者の唱道する所は一般に唯心主義になつて來たのは大に歓迎すべきである軍隊の教育も進歩の景況を示すにつれて形式上巧みになつて其本義たる精神を閑却するに至つては事實の進歩でなく一種の虚飾に陥るものである。

世間の教育者は軍隊教育を觀て其訓練の周到なるは羨望に値すると稱して居る是は御世辭で言ふのではない事實學校教育は養護教授に就て其道の發達を告げつゝあるが訓練に至つては諸種の事情から其分量の多きを望む事が出來ない風である然うかと言つて此訓練が軍隊教育の精華ではない二年兵役の立前から論ずれば訓練は限りある範圍に縮少されたので此補ひを

附けるのは即ち精神萬能の行方に歸する譯である。

詳しい教育論は別として、此難事たる軍隊教育に従事する者の修養と研究とは一日の儉安を許さぬ事を覺悟すべきである。

教官たると同時に指揮官たるの將校は、寔に尊いものである、而して教官たり指揮官たるは隊附將校の特権である。

至誠、熱心、親切、慈愛、簡素、機敏、忍耐、決斷、強健等は教官たり指揮官たるもの、缺くべからざる素質である、殊に慈愛、簡素の二者は中隊附將校の特性たらざるを得ぬ。

男性的に眞に情けを感じ合ふのが武士道の本義である、義理の源泉が是である、嚴格なる上下の間柄に慈味を加へて始めて中隊の生命は繋がれるのである。

大高子成が

踏むな々々草は草とて花心

の吟を味ふ時、眞の武士の大慈悲心を感得することが出来やう。

簡素に至つては軍人皆一様であるべきであるが、特に直接下士兵卒に接して武を練る隊附將校には、體裁などいふ懸念は邪魔物である、彼の犬馬の勞に服すべき若き士官が演習場裡に美服して人形の如く佇立せるは寧ろ唾棄すべき感がある、又一方下士兵卒と融和して質實なる家庭の人たるには餘りに劃乎としたやり方、早い話が乙にすまし込む風では下士以下を同化させることが出来ぬ、淡々たる簡易なる心事は統御の根基である。

第一期中、初年兵教官は情況上熱心となるが、其他の將校が此期間を以て油の賣り時となすのが普通である、随つて初年兵に就いては、中隊長と其教官とが姓名を知り、性質を明らかにし、世話を焼くものとのみ解して居る向も往々ある、此等は多くは兄分たる古參將校である、恬然たる古參將校の態度は時として困りものである、更に之に類する現象は第一期のみならず、教育年度中繼續する傾がある。

時とするに、中隊の働き手は最況若き士官に限られ、他は眞の後見役に過ぎず、中隊長亦古參將校を遊ばして置いて、新參將校のみに重荷を負はするといふ奇觀を呈することもないではない。

爰に又中隊將校を分つて、練兵將校、野心將校、樂觀將校の三つに色分けをすることもあると思ふ。

練兵將校とは中隊長の命令をよく遵奉して大に活動するが、多くは自己の修養には勉めぬ、典範令の研究すら怪しい事がある。野心將校とは中隊の事は手を出さず、然りとて時々生意氣な意見丈はいふ、先づ自身將來のことのみ考へて、大學受験の準備に忙しいか又は語學の勉強に身を入れるか、乃至は其他の物質的個人的利益を収めるに汲々としてゐるかである。樂觀將校は氣の抜けた麥酒式で、多くは不平の極、樂觀に到着した人物、萬事適當といふ側である。

處で、練兵將校の若き者は經驗に乏しく、殊に内務及人事上の處置に就ては、

迂濶した點が多く、爲めに特務曹長、曹長邊から馬鹿にせられ、小僧扱を受け、野心將校は多く中隊長と合はず、樂觀將校は流石に古い丈あつて、事務室に入込み中隊長に合槌を打つことに馴れて居るから、表面體面は保つて居るもの、事實働かぬので如何ともし難き場合がある、時としては勝手な振舞に及び、軍紀風紀上面白からぬ點がなくもない。

若き士官の大學準備も宜からう、語學の高等試験も得手には帆を揚ぐべしである、が眞に中隊の爲めに、數年盡粹した上で、中隊長の思召により、其勉強の便宜を受け、公務の餘力を以て勵むべきである、彼の黄口兒が士官學校から返るや其儘、教程に噛り付いて、未來の參謀を以て自任し自負して居る有様は、生意氣とも何とも評しやうがない。

序であるから大學校學生候補者に就て予の所見を語らしめよ。

隊附の經驗は自己本位の勉強の中に終り、何等貢獻する所もなく、軍隊の實質實情に就てさしたる研究、蘊蓄なく、況んや軍隊と外部との關係の如きは全

く御存じなき白面の一書生、忽ち望を得て青山原頭の學校に通ひ、やがて有難き天保錢を贏ち得て將來の飛躍を試む、秀才か俊才か知らねど、只餘りに此間の現象の奇異なるを可笑しく感ずるのみである、將來は候補者條例を改正して隊附三四年を経た中尉のみとする必要があらう、又部隊長も此事に就いては充分なる考慮を要すること、思ふ。

官衛附將校に至つては、吾人從來の意見もあるから其一端を洩らさう。

第一、官衛附將校は比較的優秀な者である、仕事は多く靜的な事務であり、机の上で細かい事をやる又大きな事を坐ながらやれる、周囲は殆ど高位高官の人を以て充されてゐる、随つて隊附將校とは面目を異にする所が多い。

官衛附將校は役徳として、高級の方々に親炙して、其恩顧を受くるのみか、薰化に浴し、本元の意見及解説を聴き、仕事の上から軍事行政の系統、諸條規の運用等、大局の觀念を得ることが出来る、是を以て益、深く軍事の攻究に努め匪躬の勞を效さねばならぬのである。

賢明なる官衛附將校の凡てが然うとは決して言はぬが、茲に其起り易き弊害、惡風潮を掲げて、他山の石たらんことを希ふのも宜からうではないか。

官衛附將校が隊附將校を蔑視睥睨してゐるのが抑、いかぬ、己も隊附であつた其間、如何なる經驗を嘗め、如何なる成績を挙げたか知らぬが、喉元過ぎて熱さを忘るで、隊附將校の要職は今や彼等の眼中には勞働者と映じ、徒に營々として、而も終に浮ぶ瀬のない低級將校に見え、單簡な何も知らぬ愚物と思つて居る。

此倨傲なる心の一番恐るべきは、つまらぬ虛榮の中に不知不識、軍人精神を磨滅してゐることである、官衛附將校たるもの、一夜胸に手を當て、軍人精神の保持如何を三省して見ると宜からう、同期將校中聊か優秀の地位に居ること、は、軍人の眞價に何等の交渉はないのである、榮達のみを目的とする心理は、精神的情落の第一段である。

軍紀風紀を口にして、軍隊を批評することは流石に知つて居るが、内心軍人

精神に乏しくなつて居る官衛附將校の態度は如何、服装は常に立派であり、黄い懸章は如何に其身装を飾るか、立派なる容姿は宜からう、華美懦弱に流れてはいかぬ、香水を用ひ、髪油を使ひ、或者は薄化粧すらするものもあるとやら、斯うなつては既に軍人中の人形、昔の公卿伶人に落ちてゐる、太平の御代、文化の時代の官衛附將校は其指環の金や玉の輝きに我と我身を眩惑されるやうになりはしまいか。

軍隊より出づる停職將校は數に於て多いのは寧ろ自然である、官衛附將校の不品行不徳義漢は率に於て少くあるまいと思ふ、何となれば隊附將校の不品行は早晚發覺されるが、官衛附將校の巧に隠れたるやり方は燈臺下暗しの御蔭で顯れぬからである、悪く言へば辛辣なる不徳義行爲は官衛附のものに却つて多いと思ふ、風采のいゝのと、小才のあるのと、之を行ふ餘地と機會の多いのが彼等の武器であるかも知れぬ。

予は屢、中央部の天保錢を附け、繩を掛けた將校が田舎へやつてきて、傲慢不

遜の態度をなし、甚しきは服装を亂し、敬禮法を缺けるを目撃して、軍隊を視察し之に神聖なる講評を下す地位の人として如何はしいと考へたことは一再ではない、車上新聞を見つゝ、視察すべき軍隊に向ひ、外套の一方の袖は手を通さずダラリと垂れて、葉巻を吹かしつゝ、敬禮を受けても答禮もせぬ有様は、歐米の軍隊に見るべく、我邦の軍隊には許すべきではない。

日常高位高官に接する彼等の腰の低さは、軍隊又は地方に於て下級者に對する腹の張り工合と反比をなす、是に於てか武士の眞面目が疑はれるのである。

要するに慈愛と簡素とは全く中隊附將校の專有性でもあらうか、情けない話ではある。

予が皮肉を極めた酷評は、定めし隊附將校、殊に官衛附將校の青筋千條を誘起するであらう、之を讀みて怒るものゝ眞率は却つて嬉しいし、黙つて引込まぬ生氣は大に期待する所であり、之によつて反省さるゝ方もあらば望外の幸

福である。

隊附將校は自重すべき要職に在ることを考へ、官衛附將校は自分を辨へて共に提携して軍國の爲めに盡瘁すべきである。若き士官が其職に忠に、其奉ずる所質實堅固なる程、見て快い事はない、やがて是れ社會萬人の希望である。筆者豈徒に人の非を擧げんとするの意志であらうか。
諸彦、益々武健、忠勤なれ、至囑々々。

若き者の權威

春の草の萌え出でたるが如き氣分は、所詮、若き者に於てのみ見らるゝ所である。蒸々として生育すべき銳氣を其中に見出すべく、洋々たる前途が其上に輝いて居る。

只伸びんとするの勢、凡てが愉快に爲さるゝ調子、制肘を受けぬ行方は、若き者の心理として、自らなる傾向である。

苦痛を感せず、時として強て之に當らうとする、新らしい建設を試みむとする、剛健なる意氣、古い型式に満足の出來ぬ、無意味の屈從を屑しとせぬ、氣魄は、若き者の使命として、天與の道程である。

身體の筋組織及骨質は柔軟であつて、彈性に富み、多少の障礙には傷まぬ丈の抗力をもつて居り、疲勞困憊も暫くして恢復すべき活力を備へて居る生理は、若き者の享受せる特質である。

爲さんがために存在するといふより、外に、解釋のしやうがないとすれば、若き者の特性は何等かの要求を意味するものでなくてはならぬ。若き者が此特性によりて活動すべきは當然の約束である。此特性を發揮して凝滞なき所に始めて若き者の權威が認められるのである。

人間第一段の活動は試みによりて始まる。若き者の思考及行爲は凡て是試みである。試みであるが故に制肘を受けぬのである。随つて放膽であるべき所以であり、潑刺たるべき所以である。

小學兒童がイロハを教はるときは、正にあらゆる官能の働きを充實させるであらう、一生懸命である、他を顧みぬのである、之に對しつまらぬイロハを今習ふ所か、と揶揄ふ者はあるまい、中學生にしる、大學生にしる、小學生徒に對し全く何等の輕侮を挾むことが出來ぬ、此に小學生徒の權威が存するのである、若き者が仕事をする時、狐疑し逡巡し、他に氣兼ねをするやうではいかぬ、放膽なる試みは自己の權威であると心得てやらねばいかぬ。

若き者の活動が試みであることは、研究の餘地の大なることを示すことに當る、試みをなすに方つての第一研究、準備が先づ行はれ、試みの後に又第二の研究が來るのであつて、此第二の研究は、實驗後の考察であり、更に仕事の擴張を胚胎さすものである、研究は斯くの如く、實施と表裏し、循環して律をなすもので、常に其用意と心掛けが必要であり、決して屈托があつてはいかぬ、研究に就いての態度は、全く赤裸々たるべきである、言ひ換へると自己開放である、自己開放があつて始めて、何物をも受入るゝことが出来る、此汲收が第一

一義である、汲收の後は濾過があり、精選があり、成案が成就するに至るのである。

自己開放の爲めには、廣く人の説を聴くのがよろしい、少くも自己の信頼する人につき、又は書物によりて、意見を涉獵すべきである、併しながら時としては、自己開放が必要とは云ふものゝ、徒に矛盾撞着の多い雜多な意見を吸収するよりも、憑據を捕へて掛ることが、大事であり、近道であることもある。

茲に「悉く書を信せば書なきに若かず」といふ先哲の語があるが、之は深く研究するの必要を、潤色して言うたもので、上つ面の香ひに酔はされず、其眞髓を窺ふことは心得べきことなのである、深く研究すれば、其良否は自ら判断されるのである、單に書籍を廣く讀むか、狭く讀むかは此に至ると別問題となつて來る。

研究には必ず質議を伴ふ、質議は進歩の根源なり、と古哲は道破してゐる、質議に對しては小供らしき態度が望ましいものである、卒直なる心理は質

議の門戸を開く鍵である、純なる心を以て、順當なる逕路を辿つて行けば、質議は足許から開けて、研究の目的は段一段と達成することが出來やう。卒直なる態度を以て質議を提供し、他の意見を聴くのは、是れ又若き者の權威である。實際に於ては、此質議の難關にぶつかると、降服するものが多く、折角の研究を中絶するに至るのは、寔に惜しむべきである。石上に静坐すること三年、遂に菩提樹下に得道した時の大聖釋迦の喜びは如何ばかりであつたらうか。彌陀の負ひ給へる御光は、此時の光明である。欣喜の迸りである。義を見て爲さざるは勇なきなり、當然研究に伴ふべき質議を征服するには勇氣を以てせよ、勇氣に缺くるものは、遂に光明を得ずして終る運命をもつてゐる。

若き者が他の嘲笑を憚り、失敗を恐るゝやうな、薄弱なる心組では研究は出來るものでない。

青年將校といふ言葉がある。青年將校とは必ずしも士官を指していふのではない。佐官と雖も青年將校である。然るに佐官連中は士官を捕へてやゝもす

れば、青年將校、々々々々といふ、是は却つて可笑しいと思ふ。併しながら若き士官も亦、青年將校と呼ぶるゝのを侮辱と思つてはならぬ。青年將校なる言葉から直ちに若き者の權威といふことに聯想すれば、忽ち昂然として、意氣の揚るのを覺えはせぬか。予は青年將校である。自ら稱するやうなのが、寧ろ好まし

いと思ふ。青年將校といはれて一種の侮辱と感ずるのは、老巧を以て自任した

いといふ虚張心から起るので、自ら若き者の權威を放棄して居るものである。

猛烈な演習か長途の行軍で、氣息淹々、餘力なく、又は靴傷でも造つて、跋を引

きひき、些の顔色なき中隊長、或は故參士官を見るとき、若き者の胸の中には如何なる感想が起るか、又其と同時に如何に奮起心が頭を擡げるか、予は青年將校なり、斯の勞苦、斯の忙處に在つて、而も豈餘力なからんやといふ自負の念は必ず湧起するであらう。氣を負うて立つ若き者は、然らざるべからずである。正に是れ天賦の舞臺である。

早く老ゆる國民は禍なるかな。

青年將校たることを誇りとせよ。若き氣分に漲れる軍隊は常に新銳である。

若き者の弱點

盲蛇に怯ぢざるは若き者の弱點である。元氣の迸る所無鐵砲となり、亂暴となり又は不節制な耽溺に趨ることがある。廣く世態を見、深く人情を味つてゐないから一徹となり、随つて人に對する同情心に乏しく、應對は淡白率直に過ぎ、事に當つての處置はともすれば、其一部にのみ制肘せられ、若き血の漲りは惜しいかな一方にのみ傾注されて、諸種事情の分析綜合をなすの斟酌に缺くことがある。

若きが故に恕すべしとされる事もあらう。元氣で面白いと喜ばれることもあらう。が將校の地位上許されぬ場合のあることを知らねばならぬ。

聯隊の衛兵所に面會人が來た。單簡な出立ち、袴のみ無造作に穿いて羽織は着けぬ、餘り偉い人でも無さうである。面會人はさる中隊の某にと取次を頼

法

面會人

むだ、衛兵は直ぐには答もせず、頭の上から足の先迄見上げ見下ろした末やつと「今は演習中だから居らんかも知れんよ」

面會人はさり氣なき體で「然うですかネ」と謂ひつゝ、袂を搜つて名刺を取出した。「陸軍歩兵中尉、々、々」

「斯ういふ者ですから御頼みます」

衛兵の態度はカラリと變る。「マア少しお待ち下さい」と早速衛兵司令を呼んで來て平身低頭。

將校は在郷軍人分會長として郷里出身の兵卒の安否を聯隊に訪づれたのであつた。其要領を司令に話すと、流石は將校に對する一通りの禮儀立つた挨拶はしたが態々遠く村から兵營訪問に來たことに格別感を深くするやうな風も見えなかつた。

將校は飽く迄も平靜に謙遜な態度で、兎に角某中隊に案内を請うて漸く兵營訪問の目的は達した。中隊長は年配者丈あつて事務室に招じ、大に來意を謝

して應對懇懃を盡し將校室に紹介の勞をも執つた中隊長に比べて、中隊附將校は格段な禮意を表する程でもなかつた。

凡聯隊の門戸に於て、外來人の受付をする衛兵の態度が、やゝもすれば倨傲不遜、不親切に流れるのは如何したものであらう、彼等は譯もなく軍服の權威を示すのである、幼稚極まるものではないか、何等の考へなく空威張りする段は幼稚なものよと一言に云うてのみ得るものでなく、時として面會人に惡感情を有たせるのみか、重要な用事を遂げ得させず、甚しき迷惑を蒙らしめることがある、若き女の面會者に對して揶揄冷評し、顔を赤らめるのを喜び嗤し遂に婦人をして辭して逃げ歸るの止むなきに至らしめたやうな事も耳にした、斯うなつては風紀上の問題である。

地方と軍隊との連繫が有識者によりて唱道される側から、斯る末輩によりて破壊されつゝある現象を、具さに觀察することを忘れてはなるまいと思ふ。豫後備の將校が演習召集で中隊に配屬される、暑い所を御苦勞様です位の

地方と軍隊との連繫

在郷將校

挨拶はやつと中隊附士官の口から出たが、腹の底では豫後備將校何する者ぞと思つて居る、然り、現役將校として在郷將校に負けぬといふ氣概は何處迄も欲しいものである、又事實、豫後備將校の多くは、典令の研究に遠ざかつてをるし、大多數は自家坐業の結果、顔色は蒼白く、姿勢は良くなく、態度はともすれば敏活を缺き、實兵指揮に至つては御話にならぬものさへある。

併しながら流石に相當の年配を以て社會に立つての經驗を有し、立派な榮職に就いて居る者もあり、諸種の議員に推されてゐる者もある、特に平生冷靜に側面より軍隊を見て居るから、時として軍隊に對する國家的、社會的觀察は現役將校、殊に若き士官の企及すべからざる點があるのである。

先に述べた如く、單に面貌及言動によつて在郷將校を白眼視、輕蔑視するのは、つまり全く豫後備將校の社會的地位を考へぬからの事で、若き士官の氣の附かぬ所であると同時に、狭い聯隊の内に、蟄居して知らず識らずの間に、井蛙的偏見に陥り、お山の大将俺一人の小自我心に捕はれ、一方から言へば精神的

小自我心

修養に努めつゝありと自負する側から甚だしき狭量を抱持するの矛盾を暴露するものであるのを反省せねばならぬ。

某隊長が若き士官をさる處に拉して宴會を開いた、宴に先だつ待合の隙を利用して、白紙を各人に配附し、扱先づ硯箱を持ち來らしめて、料理屋、宿屋等營業者では之を何と呼ぶかとの問題を出して、各自鉛筆書きの答解を徴した、此時各々に茶が注がれて出してあつたので、序に夫奴も一處に書けといふことになつた、處が故參中尉連の一部は當を得た答を爲し得たが、中參以下の將校には全然隊長出題の意味すら判らなかつたと謂ふ、随分滑稽に近い話ではあるが、隊長の眞意は區々たる「當り箱」お出花の答を求むるのではなく、社會的常識を持つべき心掛について教へるにあつたらうと推察されるのである。

若い者が早く老成して了ふのは寧ろ憂ふべきことである、知らざるを知らずとする、むき出し風な天真爛熳は、却て贊成する所であるが、一個の有階者として餘りに小供らしく、而も無謀な振舞、前後を辨へぬ動作をなすは慎ますば

なるまい、否慎むのではなく是全く各自の修養によりて發見し了得せざるべからざる事柄なのである。

橋本景岳が十五歳の時、既に啓發錄を物してから死に至る迄、刻々も修養を怠らず、而も少しも銜氣のない圓熟な手腕と動作と思想學說には、常に老大家の舌を卷かしたと云ふ事も、一に自らの足らぬ所を熟慮し、絶えず習修補綴且つ培養するに努めた結果であつて、取つて以て範となすべきではないか。

信念

徒に喜怒哀樂の情に驅られて、浮世に蠢動するものは憫れむべき哉。

何の爲めに喜び、何の爲めに怒り、何の爲めに哀れみ、何の爲めに樂しむかは、我ながら意識し得ぬ、憤怒の末に悔恨を生じ、歡樂過ぎて哀情多し、感情の走馬燈は遂に底止する所を知らず、果は茫然自失するより外はない。

若き士官を以て直に憫れむべき浮世の俗物に比するは酷である、何となれ

ば、彼等は相當に格式を重んじ、瘦我慢に馴れてゐるからである。併しながら、夫れはホンの生皮であり、此皮を一重剝いで、赤裸々の真相を窺へば、如何なるものであらう。格式もある處まで行くに拘泥であり、瘦我慢も解脱の域を距ること遠しと評せねばならぬことがある。

拘泥は俗物の態である。若き士官の拘泥は體のいゝ拘泥である。丈で、畢竟俗物を離るゝこと五十歩百歩であらう。

乃木將軍が陸軍大將の制服を着け、東郷元帥が大勳位嚴めしく帯びて居られても、誰が其榮達に誇り、其威光を振り廻すものと見るであらうか。將軍や提督は既に々々拘泥などの分子は微塵もないのである。

又乃木將軍が宴會の席上、莞爾としてをられる寫眞があるが、之を見る人は直に、其温容の期せずして人を引附けるのを覺えるであらう。更に東郷提督の旗艦三笠の上で、日本海々戰を指揮してをられる態度は、人をして如何の感想を喚起せしむるや、只々譯もなく卒然として襟を正さざるを得ざらしむるで

あらう。修養の極致を得たる人の權威は自ら犯すべからざるものである。何事によらず、修養は信念を作ること。歸着する、何なりと信念が出來たことすれば、其第一段を成功したものと謂へる。

無意味に物事をする人は少なからうが、信念のない仕事は効果が揚らぬ。所謂魂が入らぬのである。信念の力の偉大なることは今更言ふ迄もないことながら、人は恐るべきでなく、信念は畏るべきである。ことを知らねばならぬ。

茲に加藤清正の信念に就て少しく語らうか。

徳川の世となつて、清正は肥後の領主であるが、將軍の機嫌伺ひの爲め江戸へ上らねばならぬ。其時、清正は國許を發して、先づ大阪に秀頼に伺候し、夫から駿河に至つて家康に謁し、後江戸に上つて將軍秀忠の前に參候したものであつた。此事に就て江戸城では議論あつたと見え、一日、清正を饗應した後、酒井、土井等譜代の歴々、清正に對つて、我等貴殿の爲めに意見申進せたく儀三ヶ條あり、御承知あるべきやとゆつた。清正は、御意見とあらば、承はるべし、其上にて兎

角の御返事申上げん。そこで酒井等は、外でも御座らぬ、貴殿熊本より参勤の節、常に大阪を先にされるが、今からは何は扱措き先づ江戸に來りて將軍に御目通りの上、歸路大阪に立寄らるゝやうになされては如何、是一つ。又貴殿の鬚髯はいかにも御見事なれど、あまりに多く長くてむづかしげなり、それ削られたらば快からんと思はるゝ、是二つ。最後に貴殿は、例として騎馬三百許りを引具して上下せらるゝが、遠國の事、費用も少かるまじ。御家來の苦察も大なるべく且つ目下泰平靜謐の時なれば、三十騎程に減せられては如何、是三つ。

清正之を聞て、御厚志寔に有難い、然りながら、其一ヶ條たりとも御引受致し兼ねるのは遺憾に存すると、長髯を撫でながら一座を見渡して、拙者素卑賤より起る、然るに故太閤殿下の御恩により大國の領主となり今日あるを得たること、死しても忘るべきものにあらず、是は人間としての義理にして、舊恩に報せんが爲め、御機嫌伺丈なりとも先づ大阪を先きにするのは拙者當然の義務で御座る。第二條の鬚髯を削り棄つる段は、三ヶ條の中、最易き事ではあるが、

拙者兵馬の中に人となり、此髯の爲めに胃かまどの忍しのびの緒を緊むるによくなじみ、數月の陣に至るも毛の爲め願の痛むことさへなく便多く、拙者の爲めには、中々に棄て難き髯である、我等武を職とするものは、假初めにも戦陣の心掛を忘れぬこと肝要で御座れば、小事ながらも御諫めに従ひがたし、第三條の家來多く引連れることは、途中急に騷動鎮撫の命を受け扱は盜賊を捕ふる役なりと仰付けられぬとは限り申さぬ、其時遠國にては、急に呼立つること間に合はぬ恐れあり、騎馬三百あれば如何なる強敵にも破られまいと、最小限の家來を御役に立たせたまき心算からの事でござる、これが爲め費用もかゝれど、拙者常に身邊の用を節して、かやうに武士共を養ひ置き、其他の入費にも用立つるにて、更に苦しからず、若し此費途を惜みて、驕奢に金銀を費すことあらば、是商賈の徒の考へ、武人の最厭ふべきところでござる、元來かやうのことは貴殿等の大に奨励せらるべきなるに、人數を減せよとは、受取り難き件と思ひます。」と嚴然答解を試みた。

清正の清き心事は、却て徳川方の厭忌を買ひ、遂に禍を蒙らしめられたとも傳へられる。

予は此三ヶ條の申開きによつて、清正の條理正しきに服し、更に其信念に至つては景仰すべきを感ずるのである。

苟も教官たり指揮官たり、其總てを通じて軍人精神維持の中樞者である將校は、正に信念に生きざるべからずと思ふ。勅諭の五ヶ條を以てすれば精神教育は了れりとは、よく云ふ所であるが、扱五ヶ條を口傳へにするのは、將校を俟たずとも出来る、口傳へではないかぬ、心より心へ通はしめぬばならぬ、茲に至つては、口や文句の問題ではない、全く信念を以てすべき範圍に入る。

將校が下士卒に對する精神教育は、教外別傳を標榜して、恬然たる禪坊主の様な眞似は出来ぬ、飽く迄も、下士卒をして、率由する所、歸着する所を知らしめ、率先躬行、以て之を體達せしめねばならぬ、仍で信念のない將校は、精神教育の衝に當る資格のない者たることを斷言するのである。

將校にして、勅諭を理解し奉戴せぬものはないが、理解し奉戴するのが、直に信念を構成する所以ではない、信念は練磨の功に依る自得から生れるものである。

近時、在郷軍人に關する研究施設が發達し來りつゝあるのは慶賀すべきことである、が之と同時に、在郷軍人が其現役間に受けた教育の効果を如何に暴露するやを見て、殷鑑となす必要が大に有らうと思ふ、處で此暴露により漸く反省を促す聲をチラホラ聞くやうになつた、即ち在隊間の精神教育の價値如何を怪しむ人が少からぬ有様である、稍詳細に述べれば、在郷軍人の抱持する根本觀念は高潔なものであらうか、言語動作は如何であるか、禮儀の觀念は、那麽であるかに就て疑を挾む餘地が充分に發見される、現に除隊に際し、和服に着更へて兵營の門を出づること一步、既に敬禮が全然行はれぬのみか、軍旗に對する敬虔の態度すら怪しいではないか。

此憂ふべき状態を以て、一般國民精神の頹廢に附會するものが多いやうで

あるが、予は直に之に賛成し得られぬのである、何となれば、在營中はイッパシ立派な兵隊さんであつて、決して精神教育難といふ程のことを感じなかつたことでも分る、仍て吾人は在隊中の精神教育は、單に形式に止まり、一時の理解に甘んずるに因るとの結論に到着せぬ譯に行かぬ、口傳へにし、理解せしむる丈に止むる精神教育は、右の耳から左の耳にぬける間の時間丈の効力はあるかも知れぬ、凭んな精神教育では、百萬陀羅線返しても、恐らくは除隊前夜には消磨し盡すであらう、罪を形式に委せず、内輪の考察を充分に試みねばならぬ所は茲に存すると思ふ、若し此形式的精神教育の弊害であるとする、勢ひ中隊長及中隊附將校の責に歸せねばならぬ、あらゆる時機を捕へて精神教育の材料とし、又之か爲め特に所定の時間を費した丈で、能事了れるものならば比較的容易の業であるが、精神教育に最必要なのは、心から心への徹底であり、之が一番六ヶ敷事である、所謂心外無別法なるものである、精神は只精神を以て教育し得るとは流石に内務書綱領の名句であるが、予は百尺竿頭一步を進めて、

「須らく信念を以て精神教育に當るべし」と云ひたい、軍人精神保持の度の疑はしいといふのは、信念を以てネズ込まれた、眞の精神教育を受けなかつた結果に外ならぬと信ずる。

國民精神の頹廢は事實である、此頹廢せる國民精神の挽回に任すべき偉大なる責任を有する軍人を作り上げる當の將校ではないか、世の風潮に染んだ兵卒を捕へて、之に武士魂を入れ、更に之を渦く世間の精神海に投げ返すのであるから、實に一朝一夕の覺悟ではいかぬ。

信念を以て迫る精神教育は、日蓮の鎌倉に於ける辻説法がそれである、其意氣、其覺悟、尋常一様でないことを直覺すべきであらう、須らく信念を作るべく努力せよ、信念は力なり、身に備はるべき力也、一朝此力を得れば千鈞の重きを自覺せん、吹けば飛ぶやうな若き士官の精神講話が何になるか。

國民道徳の基準と軍人道徳の基準とは、自ら面目を異にしてゐる、戰場に馳驅すべき戦士としての本領は、戦闘を基準とせねばならぬ、戦闘に必要な性

能より軍人道徳は割り出される。そこで、我邦の成立を大綱とし、國民道徳を経
とし、軍人道徳を緯として、勅諭は訓諭せられてあることを、第一に體さねばな
らぬ。随つて、國體觀念を主とし、一般道徳の立脚地を知り、軍人道徳の要求を悟
るのが順序である。一般道徳の根基は忠孝愛國であつて、平たく言うに謝恩の
念に歸すると思ふ、日蓮は他の坊主と違つて、主師、親の三恩を説いてゐる。此恩
を感せぬものは、道徳的に生くることを得ぬ。之を軍人道徳に及ぼして來て、演
釋して、忠節、禮儀、武勇、信義、質素を説き、國軍成立の上、又戰鬪の上に引附けて説
き及ぼすべきである。此條理の外に信念の必要なることは前述の通り。
乃木將軍手記の質素論を味はつて見ると、軍人道徳に於ける質素を適切に
感銘すると共に、將軍の信念を窺ふべき一端ともならう。

質素ノ文字ニ付、學說ハイザ知ラズ、勅諭讀法ニ於テ、軍人等ノ守ルベキ
ハ、奢侈華美ノ正反對ニ外ナラズ、又儉約ノ二字ヲ連結スルモ不本意ナリ。
兵卒ノ身上ヨリ云ナラバ、絹ヤキやらこノはんかち一ふ又ハ西洋ノ手拭

トテ、厚キ廣キモノヲ持ツハ、將校ニテモ、白木綿ノ三尺手拭、コソ、實益アル
ナリ。武裝シテ、携帯スルニモ、不便ナラズ、入浴ニモ、汗拭ニモ、若シ、負傷シテ
假、綑帶ヲナスニモ、泥濘、又ハ氷上ノ滑ルトキ、靴ノ上ヨリ、纏縛スルニモ、敵
ヲ捕ヘテ、縛スルニモ、役立つ上、其價モ廉ナリ、故ニ新ラシク、清キヲ、彼ノ
一回ニ對シ、二回モ、三回モ、購得ベシ。

然ルヲ、儉約ト云フコトヲ、誤解シテ、絹マガイノはんかち一ふハ、木綿手拭
ヨリ廉價ナリト云フトモ、之レ、コソ、尤モ好マシカラヌ品ナリ、惡ムベキ品
ナリ。此品ヲ、古ビテモ、汚レテモ、用ヒ、居ルヲ、儉約ト心得ルハ、軍人ノ厭フベ
ク、忌ムベキ心ナリ。一袋ノ煙草、一杯ノ酒ハ、欲ヲ忍ビテモ、三尺手拭ヲ購フ
ベシ。

質素ハ質實ニシテ、實用ヲ充タスノ、素朴ヲ守ルベク、儉約ハ無益ニ費サハ
ルヲ旨トスベシ。約ハ吝ニ近シ、寧口節儉ヲ可トセン、其節シ得ルハ可ナリ。
國體觀に至つては、將校たるもの、確乎たる信念の源泉たらしめねばなら

ぬ。

從來、我國體に關する説明は、誰しも之を小學校時代から受けてゐるのである。随つて、我邦君臣の關係、天壤無窮の皇統、未だ嘗て外敵の侮りを受けぬ美はしき國柄といふ丈は十歳前後の兒童すら之を了解してゐる。將校の國體觀は更に之を進めて、信念たるに至らねばなるまい。

國體に關する研究が近時盛んに行はれて、有名なる學者や軍人の間に、各種の方面から説き立てられるやうである。此現象は何によつて起つたか、倫理道徳の學說乃至は宗教論も、其國家的面目を確立せねば歸着する所に苦しむやうになり、日本には日本道徳の精華がなければならぬと認識さるゝに至つたのが一つの原因であり、更に一時憲法論が起つて、ヤレ何國の流儀は斯うであり、ヤレ何國憲法制定の趣旨は茲にあるなど、詮索し、扱日本の憲法は其範を何處に取り、尙何處のを加味したから何を以て根義とせねばならぬといふやうに、議論に花が咲いて、今更可笑しき迄に人心を動搖せしめ、事新らしげに憲

法の研究が行はれた處で、所謂雨降つて地固まるもの、心ある學者は國體説を取て憲法を論じて、其歸趣を示した、之が國體研究の動機となつた第二の原因である。何れにせよ、殆ど偶然の出來事ではあるやうなもの、決して偶然ではないので、形以上學に於ては、我國成立の根本義に觸れねば、我國民の解釋はつけられぬといふ自覺が當然起るべきであり、此時代が來たのである。

扱國體觀に就て、平たく歴史的事實から説くもの、外に、概括的分類により二様の説があるやうである。一つは皇室を絶對位として認め、之を中心として國民の團結をいひ、一つは古神道の立場から宗教的研究に基いて、現御神和魂を説くものが是である。此二説は決して彼此矛盾し、反對せる意見ではなく、只論者の見附處が異なる迄で、歸着する所は一つであらう。吾人は何れも賛成であると共に、是等を打つて一丸として見るのを妥當とする意見である。

茲に是等の説の論旨を紹介するのも煩はしいから、夫々其書籍に就て見られたい、否是非見て研究せねばなるまいと思ふ。前項の所謂第一説は予に言は

せると、佐藤海軍少將の帝國々防史論上巻中にある意見が最同意する所であり、第二説については、加藤玄智博士の「建國の本義等」、又筧克彦博士の意見が夫れである。大和魂、軍人精神、武士道に關することも、やがて國體觀から歸納されて來ると思ふ。之が爲めには、山鹿素行、水戸學派、吉田松陰、乃木將軍などの意見が其真髓を示すものであらう。「中朝事實」「大日本史」藤田東湖の著書、武教小學、武教講録等の書物は良參考である。

殊に「武教講録」は一片の筆記集に過ぎぬやうなものであるが、松陰の意氣込みは實に素晴らしいもので、識見又卓拔である。憲法の本義や國體觀について、今時の人が兎や角迷つて居るのを見せたならば、松陰は定めし大喝することであらう。何しろ、武教講録一篇を見ても、松陰氣魄の存する所が分り、先生が口角泡を飛ばして説かれた熱誠なる講義振り、延いては、其直接に人を感化せねば已まぬといふ風な、真劍なる人格が窺はれる。當時松陰先生尙年少氣鋭、而かも抜くべからざる信念があつた、今の若き士官たる人よ、信念を得たる者な

らねば、眞の士といふことは出来ぬと知られたい。

希望と抱負

希望は若き者の光明である、希望に生くるとは此謂ひである、希望のある所に進歩が伴ひ、希望がなくなれば、既に退歩を始めたので、同時に精神的に寂滅したものである。

希望と抱負とは親類であるが、何れも大きい程よろしいのである。希望の小さいのは小供がそれで、乳を飲みたいとか、菓子を買ひたいとか、小供の希望なのである。随つて乳を飲ませられぬか、菓子を貰へぬと、直ぐ泣き出す。若き士官の希望はともすれば小供の様なこと、其達成せられぬを見ると、忽ち悲觀となり、不平となる。全く最初の希望が小さい所から起る。高い處に眼を着けて自ら任ずる地歩を定める大きな抱負があり、豆粒のやうな望みでなく、すんど飛び抜けた大きな希望を有つてをれば、蹉跎しても中々に心は動せぬ筈だ。眞

の希望、眞の抱負、而も大なる眞の希望、大なる眞の抱負之を持して平生を送り又之と共に見識を進めて行かねばならぬ。

大なる希望といふても、徒に虚榮に憧憬がる、意味ではない、大なる抱負といふても、誇大妄想、自ら任ずるのを善しとはせぬので、吾人は飽く迄も氣高い希望、雄偉なる抱負を有てと謂ふのである。其處には、必ず確かなる意義が伴ふ。中隊附將校としては、中隊長を輔佐して、下士兵卒を薰化して理想の軍人を作るは乃公の兩肩に懸れる任務で、乃公こそは終に、此職任を全うせんが爲めに、努力したいものとの希望は、誰しもありたいものである。

他人はよし那麽あらうとも、乃公一人は自己の天職を守る者、恐く乃公の努力は他人の企て及ばぬ所で、我が信ずる所、我が實行する所、必ずや他日彼の墳々者流をして範とせざるを得ざるに至らしむるであらう、自重を要するとの抱負は、決して倨傲なる觀念ではなく、自助の根本義であらう。

此希望あり、抱負あるものは、須らく多くの努力を辭せざるべし、大に研究し、

盛に活動し、深く反省し、頻りに人の説を聴かざるを得ぬ、徒に誇大妄想の擒となつて、脚元の空虚なるは取らぬ、所謂常に星を見て歩み、而も足の地にあることを忘れぬ、用心が肝要である。

若き士官よ、汝の希望は何處迄も大なれ、汝の抱負は飽く迄も雄なれ、頭の置き所、眼の着け所は、遠く高く又廣く且深くなければならぬ、只事に當り物に觸れての用意は、出來得る限り精細でありたいものである。

若き者の希望の大なるを嗤ふものあるは予の合點の行かぬことである、若き者程希望は大なるべきで、蘊蓄、造詣、手腕は洋々たる前途を刻むセコンド々々々々に發展して行くのを知らねばならぬ。

希望に向て進め、勇ましく進め、抱負を立てよ、之に向つて恥ぢざる如く刻々に實行せよ、法華經呼號の太鼓を打つが如く、發奮し且緊張して。

満足と安心

此稿を草せんとする時、筐底を探つて偶、舊作を得て讀み下して見ると、流石に若い氣分は其内に漲つて居るやうに感じた、左に記してみやう、満足論と題してあつたものだ。

一

「夕涼みよくぞ男に生れたる、よく働くが故によく赤裸々なり、而してよくぞ男に生れたる所以なり、男子よ、生を天に謝せよ、而して幸福を祈願するを止めよ、汝が縹渺たる神座の威靈に打たれて、美はしき自覺を得たらんとき、神は汝の手に橄欖の冠を授けん、馥郁たる香氣、花にあらずして、汝が身より迸發せん、

二

物質物質を撃つも、遂に一の靜止に歸す、勞働の後に休息あり、嘆ずるを止めよ、宇宙は常に動けるなり、而してよく靜かなり、衝突反撥せる物質の波は動けど、靈の體は少しも動かす、請ふ汝こゝに休め、よく働きよく休めといふ、汝知り得たるか。

美はしき
自覺

靜止

意志

三

あゝ人は、感情の子よ、しばらく弱きに泣きし、涙を拭ひて、強きに喜びて見よ、須磨の浦の夕風を賞するの眼をして、一度北海臘虎鳴くの怒濤に曝せよ、弱きを扶くる情ある人のよく強きに逆ふ意志あるを見ずや、彼は天使なり、汝就いて學べ。

四

赤子よく泣けども、勞れて遂に眠る、人の子死して、神の御許に至らんとき、世に不平は絶ゆべし、されど神の慈悲に浴さむ前、汝の膳羞はいかばかりぞや、涙に汚れし頬、憤怒に逆立ちたる筋、見すばらしき極み、そも得わかぬは人の心、進化の朧積みて、茲に神より感情を授かり得たる時、人は俄かに喜躍せり、やがて狂せり、憐むべし泣き且怨むことを知り、意志や智識や、よく發達せりと雖も、ひとり迷へる感情あるが爲めに、今に神の平和を受け得ざるものか。

五

感情

理想の憧憬ある人人が、現在を惡むは無理にあらず、されどあやしき現世を己が心に作り出して、理想の美名の中に煩悶せる人も多かるべしよ。よく伸ぶる物はよく縮む、人はゴムの如く彈性あるこそよけれ。龍雲を得ば、猛然として大空に飛躍せん、得ざれば甘んじて泥澤に蟄伏せんのみ。

六

只我は我に於て生くるのみ、回天の事業を尙ぶやよし、一坪の地に樂みあるも亦妨げず、靜かなる喜びと樂みとが満足によりて繋かれたるときは、其大小を論せざるなり。見よ巨鐘を支ふる鐵鈎と烏瓜を保つ細莖とは、各重力に對する關係の同じきことを、天地はよく總ての美と愉快とを包容し、且小なる美は大なる美の中に包含さるゝと雖も、亦よく獨立することを得るなり。自己を没却せざる者のみ、眞に此意義ある恩恵を受くるなり。

七

自由といひ束縛といふも、満足の許には等しからんのみ、スパルタの尙武主

義は敢て壓制にあらず、人弱くなりて壓制を感ず、然れども又人の意識は自由なり、亂世に蕩然として崛起する英豪は概は自由なる意志の權化なり、而してその成功者には常に満足の影あり。

八

おだてられて鼻を蠢めがすが満足にあらず、惡口いはれて平氣に、逆境の内蒸々生氣を持するが満足なり、知れ、満足は退守的にあらず、進取的、人士の休息所なり、一種の餘裕なり、地盤なり、奮發といひ、勤勉といひ、この上に置けば、不動なること山の如し。

九

名譽を尙びて、從容死に就くが如きも可ならん、只是も子供が菓子にだまされて泣き止むが如し、名譽とか快樂なくとも、大自我の境に満足はあるなり、大自我の境は只坦々たり、高潔なり、青天白日なり、我は鎮西八郎にして足れりといふ、眼中、官爵なく、繁累なく、只尊ぶべき自己あるのみ、自己あるのみにして、よ

く意氣天を衝き、事業八荒を呑まむとす、自己なるが故に小なるにあらず、蹲ま
れるに非ず、よく放膽なり、よく安定なり。

十

ゲーテ曰く、嗟、人の心ほど解せぬ物なし、満足のなき世に満足を求めて日夜
勞苦すと、然り満足は世にあらず、自己にあるなり、自己にありて世に満足ある
なり、満足は活動の第一歩にして、又その最終點なるを知らば、人生の自覺は成
らん。

十一

昔時の武士が夢寐に劍を忘れざりしを以て、物騒なる蕃風なりとなす勿れ
彼等は雷駟して敵前に眠るの大満足、大安心を得たりき、悔恨し、怨嗟して、心
的に眠る能はざるは現今の社會なり。

安心と斷行と題する一章の鉛筆書きも見えた、曰く、

安心論は單簡なり、歸する所計畫し、思考し而して後運命を天に任すべしと
いふにあり、之が爲めには常住不斷の研究と思索とを要す、若し常にする研究
と思索との繁瑣を厭ひ、只茫然として、安心を求むるは、是似而非なる無爲の徒
ならんのみ、無不爲故、無爲也の境地こそ、眞個安心の域なり。

人事を盡して天命を俟つ、是以上に心配するは過勞なり、神經家なり、蟬脱と
いふは畢竟際限を知るの謂ひなり、際限を知るとは自己の知能を自覺し、本分
を知り、努力を以て樂しみ、而して後綽々の餘裕、霜前太刀を枕して安眠する底
の田地を構ふるをいふなり、然れども是實は修養の極致なり、尋常一様の事に
あらず、只鍛鍊のよく之に導くあらんのみ。

若し、吾曹の安心論を一翻せば、釋然として斷行論を得べし。

思考し決意して計畫の成れる後、胸中油然として綽々の田地あらば、茲に斷
行して退轉せざること、蓋し晶々たり、斯るが故に鬼神之を避くるなり、盲進の
裡には炸裂の分子あり、吾曹の所謂斷行は、眞の安心境に根底を置くが故に、快

刀亂麻を斫り、透徹髮一毛を餘さざるものなり、一面より之を見れば満足の極なり。

超然たる自我の境地、只養ふべく只尊ぶべし、吾曹は此點に於て自己本位論者なり、而も廣濶無邊の自己本位なり。

以上随分怪しい議論であるが、若き者の過去に於て抱持せる意見として、有りの儘に御覽に入れたのである。目今に於ける予の考へは多少違つた所があるが、つまらぬ議論立てをし又蛇足を加へるのが却ておかしくも思はれて來たので、是非の賛否は一切讀む人にお任せすることゝしやう。

新時代の修養

日本の軍隊が長足の進歩をしたことに就て、何人も異論のある筈はなからう、全く是聖代の瑞祥であり、慶賀すべきことであつて、吾人は此聖代に生れた

幸福を皇天に感謝せねばならぬ。

親譲りの財産で暮す孫子は、動もすれば安閑として、自己の満足以外に何等の思慮、詮索を喚起さぬのが、人情の弱點である。即ち遺産を繼いだ息子息子は、如何にして親が此財産を作り上げたかといふことを遡つて考へて見て、其間に無上の活教訓を發見し、扱此先き、如何に此遺産を處理し使用し増殖するか、更に那邊に發展向上の途を講すべきかを計畫せねばならぬことには思付かず、只當面の安樂に、身も心も奪はれて、無爲の裡に過ごして了ふのが通弊である。

維新以來、四十年間に亘る我陸軍の變遷は、一から十迄、發達の歴史たること、殆ど一の奇蹟と見られるし、神の業ともいふべきであらう、歸する所、天皇の御稜威に因るのは勿論ではあるが、何が扱此奇蹟ともいはれる發達の経路は、何によつて成立つたのであるかを考察し研究せねばならぬ、第一此の着意がないと、現今の軍隊の眞價を認めることは出來ぬのみならず、將來の進展に貢獻すべき途筋を自覺することが、尙更思ひも寄らぬ始末となるのである。

一面から言へば、早くから西洋の文明を入れ、彼の長を取つて後れざらんことを勉めた結果であるが、併し吾人は餘りに單純なる此見解には、直に賛成の意を表し兼ねる、一口に言へば全然歐化主義の下に、我軍隊が發達し來つたのではない、成程細かに時期を劃すれば、歐洲崇拜主義の時代もないではない、又今日でも物質上、或部分、或方面に於ては其餘流を受けて居るのではあるものゝ、凡てが純日本式の基礎根底を有つて、彼の長所を合理的に同化し、煉製されて來たのである、之が却つて健全なる發達をなし得た唯一の素因であらうと思ふ、總て素質の悪いもの、又當初の着意の曖昧なものが、單に模倣を事として、一旗幟を立て、其面目を確立することは出來るものではない、出藍の譽を得る迄には、既に其素質が備はつて居り、其上に自分の工夫が要り、勉強があり、凡ての條件が練上つた所に、始めて一家の名を成すのであることを知つたならば、我軍隊建設の筋合の由つて來る所を了解するであらう。

そこで、此健全なる發達の逕路を考へると共に、勢ひ、其間に立つて、よく常に

機宜を制し、立脚地を定め、發展の努力を致した、幾多先輩の見識精勵を思はずには居られぬ、而も其等の先輩は、夫、時代を劃して、先進の意を體し、尙且つ時勢に後れず、に進展の機運を捕ふるに、着眼の精到を缺かなかつた脈絡、繼承の美を濟せる工合を認めては、讚歎せざるを得ぬ。

日清、日露の各大戦役が、如何に此間の試金石となり、無形の導師となり、天來の指南車となつたか、觀じ來れば、油然として其邊の美はしい消息に冥會することが出來、禍が一轉して幸福となり、その中から發せられた光輝が炳乎として、日本軍隊の精華を開き成したことに想到して、進取、努力、立主義の貴重なる所以を悟ることが難くはあるまいと思ふ。

又側面から觀察すれば、維新後一般思想界の動搖と畏れながら、十五年の勅諭、二十二年の憲法發布、二十三年の教育勅語、四十一年の成申詔書、近くは今上御踐祚の勅諭、陸海軍人に賜りたる中の一句とを謹み考へ合はすと、よく此間に立つて、毅然として趣旨一貫した發達を續け來つた軍隊の功績を認め

て、淵源の深くして、抜くべからざるを感ずるのである。

此停滯せざる向上一路の意志の發現は、單一なる歴史的觀察に止むべきではないので、之に因つて吾人が現在及將來に處する道の眞髓、發足點を發見せねばならぬ、といふ暗示を感得させるものである。

徒に現在に固着するものは發達を期し得ぬといふことは見易き道理であるに拘らず、凡夫は常にこの固着迷執の捕虜となつてはをらぬか。

我軍隊が既に發達の最高度に達したと思ふものもあるまいが、之に甘んずるのは即ち停滯を胚胎し、退歩を誘致するものなることを忘れてはならぬ、時代に應ずる修養は進歩の道程に就くべき第一着手である。

軍隊も半面、時代の進歩に伴ふことが多い、時代を見ねばならぬ、時代後れの軍隊は役に立たぬ、兵器や、築城の進歩のみが、時代に伴ふものでなく、軍隊の編組、教練、戰術は必ず其影響を受くるものである。

凡そ進歩の原動力が時代、其物にあるか、人、其物にあるかは、從來諸種の學者

の論じ合つた所で、明確な歸着點を得られぬことではあるものゝ、要するに循環融合して行くものである、決して取離して其一つを論ずることは出来まい、或原動力があつて主張を始め、他が之を幫助し、其内に時代の機運を醸生し、又他一般が之に倣うて大成するに至るのが、多くの成行きであらうと思ふ。

或意味から言つて偉人は時代を作る、凡人は之に巻き込まれるのである、少くも時代に後れず、常に先手の強味に行つて、時代の後手々々に廻らぬやうに心掛けねばならぬ、只願慮すべきは、時代は一種の流行性を有して居り、社會は有機體であることである、流行性はともすれば弊害の伴ふことを知らねばならず、有機體の感染は急轉激烈に來ることがあるのを忘れてはならぬ、随つて惡風潮を示す時代に逆行して、機運を盛返すのも一の大事業に數へることが出来る。

時代を研究し、時代に應ずる修養を積み、更に前途を洞察して、新らしき機運を發見せねばならぬ、時代を研究して餘蘊なく、而も其餘弊を稽へ、時代に應ず

る修養によつて之を善用し、活用し、以て世運を利通せしむるは、進歩に生くるもの、當然の責務である、尙進んでは新機軸を出し、機運の變遷を看破し、或は之を作るに至つて其功や全しといふべきである。

修養は常に時代の脚色があるものであるが、修養には常識と學究の二方面と、更に此二者の折衷される部分とがある、試みに圖解すれば左のやうでもあらうか。



内は狭義の修養

圖中、ニの部の常識の修養に就いてはよく人の言ふ所で、ホの部の研究は、將校として、上官の指導により、又自己の勉強によつて行はれるのであるが、其以外に、ハの部、ハの部及への部の修養があるのを氣附かぬものも、多いやうである。

此残りの部分に對し、聊か此章の論點としたい考へである。

抑、常識といふことが、殆ど定義を下すことの出來ぬ代物であり、隨つて難駁極まる意味に使はれて居て、時とするとの遁辭にかつき出される場合がある、所謂常識判斷なるものには、随分怪しいことが多い。

常識は素習慣を尊重する所から生れるもので、不文の歴史殊に形式を有する社會の裡に交つて行くものは、或處迄は常識を無視する譯には行かぬのみならず、世に處する上から常識を涵養すべき必要があるのである、所謂世故に慣れるとは此謂ひで、常識の深淺が大人小兒の限界を定めることすらある。常識が世に處する一つの道とすれば、常識に富んである人程、都合がよいの

である、此都合といふのは、當座々々の都合なので、永く遠く社會國家に貢献する底の事業を常識のみで達し得られやうとは思はれぬ、つまり常識萬能は平凡主義のことゝなる、人に相槌を打ち、世に阿るのが其一面である所からいへば、保守主義ともいへるし、又卑屈主義ともいはいへる。

平凡主義、保守主義も、或處までは必要であるが、世の進歩に伴ふには迂いといふ必要になる。

謂はねばならぬ、是に於てか常識以外に學究といふことが必要になる。學究といへば直に全く常識から掛離れたものと速断するのは宜しくない、人智には範圍があり、一時に新らしいものを作り得ぬので、やはり學究にも其一部は常識が伴ふのである、又他の部分は全く常識の干渉を許さぬ所もある、純粹の究理か乃至は突發的發見か是れである。

常識が多く平凡であるのに反し、學究はともすれば突飛らしく見える、然りながら時代の推移につれて、突飛でなくなるのみか、いつの間にか平氣で人が信じきるやうになり、遂には常識化してしまふ、其例は寔に數多いことで、人間

の進歩の歴史の一半は其現象で満たされてゐる。

百年前に生きてゐた人は、航空機の如きものを痴人の夢と考へるはおろか所謂夢想だにも思はなかつたらう、今では小兒でも航空機の飛行を不思議とせぬ。

單に發明ばかりでなく、學說乃至は思想も同様である、無形上の學說は皆之によつて起つて來たので、ダーウインの進化論も既に數代の人々によつて變化せられて來てをり、生命論の如きも今ではつまらぬ覺醒素ホレモンの作用だとされてゐるやうな始末ではないか。

學究には全くの理論で成立つものと、實驗から來るものと、實驗と實驗との脈絡を推論で行くのと三通りあるやうである。

精神と物質との限界が段々なくなつて行く世の中であるから、常識とか精神とかいつて徒に頑張るのは愚なことである。

常識の涵養も勿論必要であるが、學究的態度も必要である、此事は吾人の公

務に伴ふて行くこともあらうし、其他自身の研鑽に俟つべき所も多々あるの
で、之を概括して修養といへやう。何にしても吾人の修養は將來益、組織的、科學
的になつて行かねばならぬことは争はれぬことである。

軍隊に就いては實驗的改良案は勿論賛成すべきであるが、全くの推理から
出る意見も随分あることで、同様に尊重すべきものである。

所謂技術將校は比較的學究的態度を有つてゐるが、所謂戰術將校には多く
之が缺けてゐるのは遺憾である。

典範令の研究についても、日露戰役前迄は随分下らぬ議論があつて、今から
思へばつまらぬ所に無暗に力瘤を入れて嬉しがつてゐたものであつた。之は
原理原則以外、典範令其物の不備から來る事が多かつたので、編纂の體裁が改
良された現行改正のものに至つて、議論が起らぬやうになつた事柄は随分あ
る。殊に先般發布された陣中要務令は、此間の消息をよく現はしてゐると思ふ
所謂字句に拘泥するといつて、字句を無視し、理窟ではいかぬといつて、正當な

つまらぬ
力瘤

る理窟を顧みぬ愚さ加減は、思ひの外に繰り返へされてゐたのである。今でも
一般に未だ未だ然うであらう。

此邊の事を味つて見ると、總てが組織的に進まねばならぬのを了解されや
う。新時代に處するものは、此心掛けを以つて、一處に偏せず、舊慣に捕はれず
進んで行く抱負がなければならぬ。更に世に貢獻せんと志す人には殊更の事。
序でに、軍人が世論にまごはず、政治に拘らずといふことに就て一言して置
きたい。軍職にある者が世論及政論に關與するのが宜しくないことは申す迄
もないので、何處迄も固有の主義を奉じて 陛下の忠實武勇なる軍隊たらね
ばならぬ處が此意味丈で行けばよいのであるが、履き違へて、此意味以外に誤
れる擴張をし、飛んだ範圍に迄、軍人としても當然研究すべき事をも、つまらぬ
遠慮のために、殆ど自ら無智無能を以て甘んずるやうな傾向があるやうに思
はれるのである。軍人は馬車馬的に只水火の中に飛込み得ば足れり、其他の事
は全くいらぬ、殊に政治の政の字を研究するさへ邪道である、世論に聽くのは

頭が既に外れてゐるといふ考へが是である。此考へは只々無鐵砲といふより外評しやうがない、一國の政體を知らねば國民として眞の自覺はないものである、世論と全く没交渉ならば國家又は廣く社會に棲息する人たるの意味はなくなるのである、或知名の士は左の如くに言うた、軍人的見地としては、別に意見もあるが、一應參考にはなる。

試に思へ、日本は忠君愛國を國民道徳とする國柄ではないか、忠君とは主君に忠なれと命ずるのである、其忠君の眞髓たる君主なる語は多量に政治的の意義を含んである、更に愛國とは國家を愛せよと云ふので、國家とは即ち社會を政治的に見た意味である、若しも國家から政治的の意味を抜けば單に社會である、社會となれば即ち世界共通の者、即ち人間の生活團體である、ヨシヤ國家は亡ぶるも亡國の恨みなどは少しも感ぜぬ、盛んに國家思想を鼓吹しつゝ、政治思想を禁絶して國家主義の起るべき根原を塞ぐのは心得違ひである。

政黨とか政論は別として、國民に最も大切な憲法を一度も讀むた事のない將校は數多いことであらう、勿論民法などに目を曝したものは寥々たりであらう。

社會主義は忌むべき主義と一圖に排斥するが、果して研究を試みた將校があるか、基督教は邪宗であるといふが、其教義の成立を味はつた將校は多くはあるまい、要するに斯くの如く、軍人の言ふ所は組織的論據のあることでなく、食はず嫌ひの無鐵砲な論斷が多いのである。

予は社會主義を非とし、基督教の教義に賛成せぬものである、前項は論理的誤謬の一例に過ぬ、予の眞意は新時代の修養を痛切に諸彦の胸臆に打込みたいと思ふので、此一章を諸種の意味から判断して戴きたい、勿論新らしき修養といふても、生吞込みの研究は弊害が多くて、實益は少ない、随つて研究の進路は充分に選擇されたいのである。

生吞込み

葉櫻影

此一章は予が修養日誌の一節で附中の餘技として成立つたものである、全くの參考迄に茲に掲げることにした。

○年○月○日

予は○○師範学校の校長室で、校長と相對して椅子に腰掛けて居た。

「少しお待ち下さい、今呼びにやりましたから。」

「イヤ、種々御配慮に與つて有難う御座います。飛んだ御願を申上げて、嘸御迷惑で御座いませう。」

凭んな會話を交へて居ると、一教師が入つて来て、校長に一禮するや、否や怪訝な顔をして予を見た。

「之が教育の講義を受持つてゐる、○○君です。」

との紹介に、予も立つて挨拶する。

○○先生、早速側の椅子を引寄せて、ドツカと腰を下ろし、

「貴方が教育の講義を聴きたいと云はれるのですか、軍隊教育に携はつて居る方に、態々學校の講義も要らんでもありませんか、………教育學と言つても理論は三分で、後の七分は法螺ですな——ハッハッハッ。」

單刀直入

一語、寧ろ痛快である、初對面の挨拶として、禮を失するやうな文句ではあるが、予は却つて其單刀直入的な應對振りで、○○先生の愉快なる性格を認め得て、頼母しいと思つた。

傍で校長は餘りに憚りなき教師の言草を、不興げに聞いて居たが、

「少しは夫でも、お爲めになりませう、○○君、之から君の講堂に行かれるのだから宜しく。」

は少々蛇足の氣味であつた。

「ハ、承知しました。」

飄然として○○先生は室を出て行つた。

「□□君も今に來ませう、私が**に居りました時に、××師團長から、軍隊に來て、教育の講義をして呉れど、お頼みを受けて行つたこともありません。一應は研究をして置かれて、決して無駄なことはありません。貴方の御考へは甚宜しいと思ひます、殊に心理學も御聴きになることは、益、御同

意です、教育と心理とは、離すことの出来ぬ學問ですからな。」
すると、今度は□□先生がやつてきた、至極温厚の人らしく、ニコニコして應
對する態度が、如何にも穏やかである。

「左様です、心理を研究すると、人が何を考へて居るのであるか、外観で判
るやうになります。部下を率ゐらるゝ貴方には確かに必要でせう。——承
知しました、特別の御世話も出来ませんが、何時でも御聽きに御出なさい。」
□□先生が去つた後、小使の運んだ茶を飲みながら、尙暫らく校長と話をし
て、終りに時間割を聞取つて、其好意を感謝して一先づ歸つた。

○年○月○日

昨夜の雨が上つて、心地よき青葉の日和である。

セルの服が膚に軽く觸れて、自ら悠揚として歩む。

何日いつも一所になる附屬小學校の兒供五人と道で逢ふ、今日から儂も師範の
生徒になつたのだよ」と言ふと、怪しげな顔をしてゐたが、眞實まことに學校へ入つて

行くので、彼等は暫く眼を丸くして、玄關口に立つて、儂の廊下に上るのを環視
してゐた。

午前八時十五分前、前日教へられた心理教室へ行つて見る、未だ一人もやつ
て来て居らぬ。

二階の教室の模様を見やうと思つて、廊下傳ひに突當ると、標本室になつて
ゐる、内には剝製の動物標本が置かれて、四壁には圖書や圖案の優等品が張ら
れてゐる、知人某君のが數葉あつた、パステルの面白いのが一二枚見えた。

ドヤ／＼音がしたので、教室へ行つて見ると、五六名生徒がやつて来た、勿論
姓名も知らぬ生徒ではあるが、今日から御同様君等の仲間入りをしたのです
から宜しくと挨拶すると、一同愉快げにドツと笑つた。

廊下から下を見下ろしてゐる。

××先生が下を通る、失禮ながら上から挨拶をして、先夜の禮など述べる。
教室へ大分集つた、曾て在隊中儂が教へた**子がやつた来た、トウ／＼や

つて來られましたねは振つてゐた。

其内某君がやつて來て、僕に知己の如く話しかけた。殆ど一人で合點してしまつて、

「其は愉快ですな、面白いですな………偶に參觀に來ると實に愉快でせうよ。」

某君は髭が生へてゐる、其髭が少し緒かつた、僕には髭がない、此點から見ても若き生徒であるというてよい。

主任教師□□先生が來られた、昨日の御禮を申すと、色々僕の席や本の事を心配して下さつた。——何、席は凡その相場で、最後列の入口の側の自分から定めて置いたし、書物は昨夜柳正堂から求めて來たのであつた、併し御親切は何處迄も辱けない。

一同敬禮授業が始まる。□□先生、氣が附いたやうに、教壇を下りて來て、僕に今日の講義の個所を四十三ページ、聽覺の所からですと教へて下さる、一同之

をふり返へり見る、儂たるもの多謝せざるを得ぬ。

□□先生は温厚篤學の士である。

講義は耳の内部の構造及作用から始まる。

聽覺が人によつて多少どころではない、大なる差異があるから、兒童教育に意を用ひねばならぬことに就き、大磯小學校で、男女を通じて數回に行つた不成績者の調査の結果が、其一因が聽覺機能の不良の者であつたといふ例は適切である。

音の區分中、樂音の例示は振つてゐた、生徒は思はず洪笑した、講義振りにも少し發音の研究をして、樂音に近く、而も規則的音波の下に、漸次聽者を釣り込むで行く様にする、其音樂的講演に、生徒は實に愉快に眠つてしまふことが出来る。――

「坊さんの讀經の音聲は樂音に富むである、あれが悲しみの情を有つて居る葬式の時でもなければ、聞手はやはり都合よく眠りを催すであらう。――

「障子の紙の破れから吹込む風の微かな音にも、微妙な楽音を發することがある。靴の革の鳴る音にも楽音に近いのがある。小供が柔らかい靴を穿かされて、嬉んで飛び廻るのは、靴を穿いたのが楽しいばかりではない、其柔らかい革から起る音が、キューキューと規則的の楽音となるので、小供をして思はず、其自

然の音楽に酔はせるからであるとも謂へる。」
 □□先生、幾分詩味ある講義をされる哩と思つてゐる内、いつか下で卒然喇叭が鳴る。

講義は終つた、餘り時間の経過が早いので、呆氣ない感がした。

生徒四五人に取巻かれて、話をしながら廊下に出て、階段を下り、上履を長靴に穿き更へて聯隊に行く。

女子部教室前の薔薇が美しく雨後の色に輝いてゐた。

午前九時頃の光線が極めて氣持よかつた——道を通つて、暫らくは考へながら歩むだ。

支那語研究案

五年前の秋季演習の際であつた。予は某歩兵聯隊本部にあつて、第一種演習開始前の集合地に着いた夕である。一般方略特別方略が示され、情況を與へられて、聯隊長は圖上に於ける研究をされ、忽ちにして當夜の前哨配備及翌日に關する支隊命令が成つた。

早くから集まつてゐた命令受領者は、立派に印刷された所要の書類を受取り、注意事項を聞取つて、意氣軒昂、明日以後の奮闘を期すべく、腕に捻りを掛けて引取つて行く。

本部宿舍の階上で晚餐が始まる、聯隊長は副官、旗手及聯隊本部附將校を相手に、徐ろに盃を廻される、一座の武士の心事は、折から上つた月と共に、水のやうな秋の晩の清く澄んだ氣分であつた。

すると當番が一枚の名刺を取次いで來た、のを見ると國民新聞の記者某と

て勸む一盞」

要するに是、虚勢であつた、心中二の矢の準備は聊か怪しかつたものだ、然るに先生洪笑一番、盃を受けながら、

「多謝々々、貴殿は大に話せる御仁だ、拙者元來城廓を設けて人に接することが嫌ひ、赤裸々の御世辭拔きの議論、少し御氣に障つたかも知れませんが、時に石井さんとやら、一句浮びましたから願ひませうかな、大分御馳走になつて、愉快に酔ひました、

將軍今夜心如海、

休問胸中策自成、

之に附けて戴きたいものです。」

「大將迂回攻撃を試み居つたな、何だつて、夫れちや起承の二句を附けろと言ふのか。」

聯隊長「石井、シツカリやれ、ハ、ハ、ハ、何を出すかと思つたら、下手八庚で轉

沈吟

結を出しをつたな、兎に角、石井前をつけて見い。」

予輩一介の武辨、固より詩の心得のあるものではない、が行掛上何とか應對せねばならぬ、沈吟數分、中々出來ぬので、頓と閉口した。

漸くにして聯隊長の御助太刀を頂戴して出來上つたのは、

湘北月明秋氣清、

三千貔貅奈何情、

「上杉謙信もどきだな、湘北はチト可笑しいな、併し那麼やら七絶が出來たやうちやのう。」と聯隊長は笑まれた。

記者の氣焰は、やつとの事で鎮制することが出來て、予はホット息をついた、
「湘北月明秋氣清、三千貔貅奈何情、將軍今夜心如海、休問胸中策自成、初學の作、絶句の體を得てをらぬことは言ふ迄もない、

が、御蔭で翌日からは、其新聞記者に、演習の忙しい間にも、石井サン石井サンと付き纏はれて、却つて有難迷惑を感じた。

痛切に感
じた

此閑話を徒に予が下らぬ自慢話と解されては、聊か恐縮である、爾來予は痛切に將校の修養といふことを考ふるに至つた事實を諸彦の前に白狀するのである。

支那時文

最近戦亂
に對する
覺悟

漢文研究——將校の修養中其尤なるものゝ一たるを失はないであらう、百尺竿頭、更に一步を進めて、筆談の爲めばかりでなく、一通りは會話の用を充たし、且支那時文の通讀丈でも出来るやうな研究が望ましいのである。
歐洲動亂一度世界の耳目を聳動せしめ、其餘波によつて、東洋も漸く多事ならんとして來た。殊に膠州灣の攻略で直ちに安心すべきでなく、東洋の局面は之から複雑を極むることを知らねばならぬ。

予輩黃口兒、支那問題を云爲するは、口幅廣い話であるが、東洋の地圖を披いて見れば、將來の紛擾が那邊に爆發し、局面が如何に發展するかを聯想し、殆ど戰慄を禁じ得ぬばかりである。茲にはヨリ多く言ふを好まぬ、支那語研究が日本人として必要なことは、恐らく誰しも異存があるまいと思ふ。

前途遠遠

茲十年の
後

妙な制度

方
案

日本人が、一般に外國語研究の觀念に乏しいことは、概かほしい次第で、歐米の小中學生徒が必ず二三個國の語學を研究する状態と、我邦の現況とを考へ較べたならば、前途の尙甚遠なるを嘆せずには居られぬ譯である。

心あるものには必ず支那語を研究せよと勸める、一步を進めて、更に日本將校一般に支那語の研究を課する必要を認めると言ひたい、茲十年の後は、確かに覺醒の時期が來るに相違ない。

元來日本將校は、英佛獨露清何れかの語學を修める制度になつてゐるが、之は智識を外國から輸入すべき時代の遺物とも言ふべき制度なので、一方からは或種の人の例へば、海外差遣者などには、夫其國語に精通せる者を採用する必要があるとするも、一般には必要の少い英佛獨露の語學を修めしむる意味を解するに苦しむ次第で、寧ろ一樣に之から緊要なる清語を平生から研究せしむる方針とせぬのは間違つてゐるやうに考へられるのである。

扱其研究の具體的方案が立つて居る譯ではないが、幼年學校及士官學校に

於ける其講習者を新設し又増加することが、せめてもの手段であり、思ひきつて實行が出来ることならば、各自研究語學の如何に拘らず、支那語は必ず定規の學課として一般にやらせるのがよろしい。

次に各師團司令部所在地では、清語の教師を一二名宛聘して、順番に各聯隊に教授するの計畫を立てたならば、其講習は望み得られぬことではなからう、之が爲めの經費は何とか工夫すべきで、爲し得る處では、各聯隊任意に教師を呼ぶのもよからう。

清語研究の最困難とする點は發音にある、故に正則に教師に就くの必要があり、此教師を聘することが地方によつて六ヶ敷のであるが、之は中央部が地方の交渉に接し次第、肝煎をして教師の世話をしてやれば結構である。

吾人は、支那語研究の一日も早く、廣く實施されんことを希ふものである。

廣く眼を地方に放て

身、軍籍に在つて職務を執行するが爲めに、地方の情況を知らねばならぬことは、本書の殆ど各章に諸種の方面から説いても置いたので、其必要なる所以を更めて茲に説明する迄のことはなからう、殊に軍隊と地方との連繋は近來盛に實施せられつゝあることである、併しながら、軍隊と地方との連繋の實際の景況に至つては、予は其事が重に上級者の頭の中の考へ丈であつて、下級幹部の注意が、尙々之に及んでをらず、地方其物の研究は固より、其連絡の方法は如何にすべきやといふ考察の念に乏しいことをいひたいのであるが、此章では更に廣い意味で、眼を着けて見た事を専ら述べたいと思ふ。

元來地方といふ言葉を無暗に軍隊で使ふが、之に對して、意見を持つてゐる人が少くない。

地方とは都會に對しての名稱である、そこで軍隊側からいうて、軍人以外の人を便宜上地方人と呼ぶのであるが、この流儀に従へば、都會の人と同じく地方人になつてしまふ、又地方なる言葉が多少田舎といふ意味に聯想されるの

で、軍隊と地方とかいふと如何にも軍人が軍人ならぬ人を輕蔑してゐるやうにも思へる。之から考へて地方といふ言葉は餘り穩當の言葉でない、といふて他に最適切な呼方も見出せないのであるが、一應は此事を軍人として冷靜に考へて置くのがよからう。

扱、地方の人が如何に軍隊を見てゐるかといふ事を深く考へる必要があらう。近時軍隊に少しの日射病患者が出來ても、新聞などで之を大袈裟に書いて何とかいふと軍隊の攻撃をするやうになつた。此傾向を認めて、軍隊に對する反感を地方人が有つてゐることが窺はれ、軍隊には軍隊としての主義があるものゝ出來る丈の注意を加へて、地方人厭忌の府たらざらんことを努めるやうにしたいとは、既にお上の訓示にも見えるし、將校一般にも皆其心掛を有つてをり、時とすると却て、地方人士の口を恐ろしがるやうな向もあり、いらざる遠慮迄するし、又事件が持上ると性々秘密に附して、世の攻撃を避ける手段を取るやうな、消極的の方面に迄、注意が及ぶやに見受けられる。

會・世間の攻撃を受けたことに就いて、軍隊がそれではといふて、注意を倍蓰するといふやう方は、予は直ちに賛成し兼ねるので、寧ろ、根本的に地方の思潮の如何を詮議する必要があらうと思ふ。そこで、世の風潮といへば、軍人は直ぐ口を開いて、近來世の風潮は益々惡傾向を示して行く、今にして何とか矯正せねば國家の前途が案せられる、之が爲めには、軍隊教育を學校教育及社會教育と相俟つて、國民の中堅的教育とする、即國民學校として國民元氣の根元、堅實なる思想の淵藪とせねばならぬ、と説くのが普通である。之は一面道理のあることで、此抱負によつて、何處迄も教育を實施すべきであるが、予は一も二もなく惡風潮を云々するのは、目先の觀察で、其因つて來る所を研究したとは云ひ得ず、又將來如何に此傾向が推移するであらうといふ考察に缺けて居る、要するに徒に現在の状態を悲觀するのみに陥りはせぬかと思ふのである。

其因つて來る所を研究して見れば、果して全く世間が惡風潮に充たされてゐるかどうか、一概に然うはいへぬかも知れぬ、或は是進歩の道程にある一現

象であつて、強いて憂ふべきことではないかも知られぬ。又原因を尋ね其發展の経路を辿り、更に將來の推移影響を考へて行くこと、目下の情況が凭うである以上、打勝つべからざる大勢であつて、之から先きは只危険に陥らぬやう、指導を與へて世の進展に應じて行くのが却つて妥當なる方法なりといふ結論に到着するかも知れぬ。所謂角を矯めて牛を殺すで、世運進展の一現象として見れば、之を有利に幫助し、正しく進ませる道を講じて行かぬと、却つて飛んでもない外れた事になるかも知れぬ。但し之は例へて云ふた話である。

故に風潮の如何を見ることは、現今の狀態其物に眩惑されて、直に是を以て惡傾向なりと早合點するの謂ひではなく、其風潮の起因を稽へ、將來の影響を見ることを意味させたいのである。

國民思潮の變遷について、茲に詳論するのは容易なことでないが、予の認むる原因の最たるものは、比較的教育的上層の側で見れば、憲政思想と時代觀念とで馴致されたことが重であり、比較的教育的に乏しい下層の方で見れば世

の中の複雑となると共に、生活難の逼迫といふ所から來る、此二つに歸するところが出來やうと思ふ。

軍隊なるものを如何に考へてゐるかといふことに就いて、此二つからの見方をすると、即ち一は軍隊に對する國民の干涉とでも云ふべき思想で、一は軍隊に入ることが生活の妨碍たるを苦とするといふ一寸見れば、單簡な考へが是である。

軍隊は、大元帥陛下直接御統帥の下にあることは明瞭であるが、夫れは軍令の方面であつて、軍政方面からいへば、陸海軍大臣とても他の國務大臣と齊しく、議會の協賛に俟つ所があつて、各、其職務を執行するのである。爲めに、豫算編成などのことで早速其支配を受けるのである。國民の代表者である議員の思想の傾向に依つては、軍隊は此方面で悲惨な干涉に接することになり、之が推進むと或意味に於ける國民の軍隊といふことを楯にして、軍隊に對する勝手な注文迄するやうなことに立至る。現に其傾向が見えつゝあるやうであ

る。是等が憲政思想の推移より来る軍隊に對する觀念の傾向を左右する真相であらう。

軍人が政治を論ずることは好ましからぬことであり、此問題は幾分政治的臭味を有つやうに見えるが、實は法律問題である。將校も此法律問題を一應は研究して置くのは差支ないことであらう。此憲政の思想が如何なる状態で地方に瀰漫してゐるかといふことは、恐らく若き士官の夢想せざる所で、選舉運動等に地方の青年が狂奔し、一知半解の政争的議論をこねる具合を搜つて見ると、思半ばに過ぐるものがある。此一知半解な思想は恐るべきことを醸すかも知れぬ。權利義務、果ては黨派的觀念が地方青年の頭に浸潤して、忠實にして堅實なる思想を逸し去る所は、確かに一考に値すると思ふ。

次に社會の進運に伴ひ、學術技藝の發達と、一面には人口の増殖の關係から社會政策が研究され、一の時代觀念なるものが醸生される。此觀念は或處迄は人力の如何ともすべからざるものであるが、其實相を見て考察の資料とする

必要は大いにあるので、此時代觀念と軍隊とは如何なる交渉を生ずるや、偶、今次の戦争に就て、某新聞に掲載された論説が其一部を表白しては居らぬかと思ふので、其一節を記さう。

戦争と國民思想

今回の歐洲の戦亂が我が邦人に軍國主義武斷主義の免かる可からざるを暗示せしは疑ふの餘地なし、之を教育界だけの一方面について觀するも、今更の如く其の有名無實なるを叫び、國家教育の方針は飽くまで武斷主義ならざる可からず、主張する向きあり、少しく狼狽の氣味を謂ふべし。

素より戦争は絶對的に惡なりと云ふが如き素朴なる平和論は一顧の値なしと雖も、反對に又戦争が國家的福祉の最終の手段なるが如く考ふるも亦誤れり、古來曾て戦争だけに限りて眞に強大を致せし國家は有らず、戦ひによりて得たる國民的膨脹は斷じて持久性質を有せず、戦争に勝つは唯物質的繁榮に達する一手段に過ぎず、此の手段が成功さへせば國家の幸福は求めずして至ると思ふは樂觀に過ぐ、國民には物質的幸福以外に精神的結果が必要なり、之れなくば國家は沙上の家屋の如くなるべければなり。

然るになほ一層進んで考ふれば此の物質的繁榮といひ精神的結果といふものも亦最後の

目的にあらすして僅に、より大なる目的の手段たるに過ぎず、即ち武力の戦場にて、平和の戦場に於ても、人類が相互に敵視するなく、憎悪する事なうして、相競ひ相争ひ相懸し相戒めつゝ、黄金時代を實現せんとする目的のこれなり。

現に今日の獨逸は自己の侵略主義によりて、吾自ら驚れんとするものなり、其れを見て、各國民は無謀なる野心の眞に國民的禍根なる事を悟るが當然なるに、左はなくて、謂はれなく、彼の侵略主義を學ばんとするは、愚も亦甚し、教育者宜しく三省して、濫に好戦國民を養成せざらん事を注意すべし。

敵愾心の緊張せる今日の如き場合に、平和思想を鼓吹するは、策の得たるものに非ず、而も俗受けのよき好戦的の論調は、極端なる平和論と同様に、禍根その中に伏在す、平和も戦争も絶對的幸福の情態にあらず、高且つ高尙なる目的に達せん爲には、個人も國家も戦争を必要とす、而も絶えず戦ふを以て目的とするは、羨むべき理想的境涯に非ず、所謂平和も戦争も大處より觀せば、畢竟一の手段に過ぎず、大目的の自覺なき戦勝は、骨折損のみ、俗論に誤られて、國民思想の指導を二三にするなきを要す。

又近時の平和主義に關する一説として、某博士執筆の論文の一齣を掲げて見やう、是は最近の某誌上に出たものだ。

此平和的競争は如何に激烈に行はれても、到底調和すべからざる最後の衝突と云ふ觀念を

民衆の間に起さしむる力は極めて薄かつた。此の如き状態の下に於て、有力な平和主義非軍備主義の勃興するは、怪しむを要しないが、元來此平和主義は二大勢力に由つて支持せらるるものである。一は人道主義又は世界主義の信念より起つた平和思想であつて、平和自身に直接の價値を認めんとするものである。併し今日に於ては之れよりも遙かに強き他の一勢力は、平和自身よりも他に目的を有し、此目的を達する爲めには何よりも國際競争が邪魔となるから平和を主張するのである。故に此勢力は平和に對しては間接的のものではあるが、今日先進國に於ては殆んど只一の平和論支持力たるの狀を呈して居る。此間接的勢力とは即ち各文明國の内部に於ける廣義の社會運動である。歐洲文明國では上述の如く國と國との間に生哉死哉と云ふが如き眞剣な生存競争の觀念は薄らぐと同時に、一面各國内部の狀態を見れば、生産は非常に増加し、文化は著しく進歩して居るが、社會各階級の間にて、之が分配は頗ぶる不平等となつて居る。故に社會の民衆化的發達の歩を進むるに従つて、各階級間に於ける權利々益の分配問題が重要視せらるゝに至つたのは、自然の勢である。勞働者は資本家に對して財の分配の公平を争ひ、婦人は男子に對して政權又は廣義の人格權の平等を争ひ、此の内部階級的の競争熱の高まるに従つて、人生の問題は恰も此一點に存するが如き思想を生じ、分配を平等にするが爲めには國民全體の進歩は多少妨害せらるゝも可なりと云ふ傾向が強くなつて來た。公益と云ふことよりも公平と云ふことが強く人心を動かすの勢を生じて來た。固より分配を平等にするの結果として、一國全體の進歩の速度が幾分

減少するに於ては、他の國民に對する生存競争上忽ち不利に陥るを免れないが前述の如く
民衆の間には國々國々の生存競争と云ふ觀念が非常に薄らいで居るから、此點に付て彼等
は大して懸念しない。併し全然懸念しない譯ではない。彼等は階級戦に熱中して居る間にも、
時々惡夢に襲はれた如く國際競争の懸念を胸裡に浮べざるを得ない。是れ實に今日の文明
國を左右するが如き勢力を有する所の社會運動が、同時に非軍備主義平和主義を鼓吹して
止まざる所以である。尤も彼等の平和論の動機は必しも單純ではない。或は分配を平等にす
るも社會全體の進歩就中産業の進歩の速度を遅緩ならしむることなしと信じて、軍備に
反對する者もある。或は軍備を鞏固にする爲めの負擔は特に勞働者に對して重い。例へば兵
役の義務も主として下級民が負擔せねばならず、又國に由ては國防を重んずるの結果工業
勞働者には社會觀を異にする所の保守的な農民の保護を行ひ、農業保護税を設けて食物を
騰貴せしめ、之が爲めに勞働者が最も苦しまねばならぬと云ふが如き事實の起ることも、現
代勞働者を非戰論に傾かしむる一因となつて居るが更に根本に遡れば極端な社會運動
の理想を速かに實行すること、眞剣な國際競争とは互に兩立し得ないと云ふことが、階級
戦に熱中する者をして非戰論に傾かしめるのである。

是等は然迄極端なる論説と見做すのは酷であつて、寧ろ凭ふいふ思想は、世
態の推移につれて起る時代の産物であると云へる。

第二段の生活難の關係から軍隊を見るのは、多く個人的の觀念であつて、當
局者が之を綜合して來ると、中々輕視することの出來ぬ問題となるのである。
徴兵忌避者が多くなり、壯丁自身ばかりでなく、一家の生活を共にする親近者
は同時に此觀念を把持することとなり、随つて其勢力及影響は侮るべからざ
るものである。其觀念の如何なる程度なるかは、之を明瞭に知るを得ぬが、其形
以下に現はれた所で觀察される丈でもかなり其勢の趨く所を察するに難か
らぬ。例へば徴兵検査場に於ける詐病者の如きは極輕いものとするも、神社佛
閣又は名も知れぬ淫祠へ徴兵除けの祈禱をするものは決して寥々たるもの
ではなく、其他身體を毀傷し又は云ひ知れぬ暗流ともいふべき慘事、不快事さ
へも行はれつゝあるではないか。

某隊がある目的で鐵道輸送をする途中、一停車場に或兵卒の家族が面會に
來た。兵卒は車窓から半身を抽出して何を挨拶するかと思ひきや、在隊服務の
苦痛を訴へて愁嘆の聲を放つて家族の同情を乞ふた。家族も家族で之を聞い

て泣かんばかりに叫び且勞いたはつた。同じ車には多くの戦友が乗り合せて皆首を出して居るのは勿論、停車場へ送迎に來た人も亦其兵士の家族ばかりではなかつた。元來見得張りの強い、負惜しみの勝つた日本人であるから、凭んな時は殊更元氣よく嬉しい顔を見せて、家族と言葉を交はすものである。然るに此兵卒の仕打の如きは、眞情の吐露といはいへるかも知れぬが、側の見る目も實に見ともない醜汚の極であると思ふ、少くも男性的の言動といはれまい、凭ういふ風になつてきては誠に心細い譯である。

目下日本に於ける中年寄以上は皆維新以前の出生者で、國民皆兵主義の制度の立てられぬ前の遺物であつて、其思想も怪しいのが多い。新しい時代の人の放逸なる思想を危ぶむと同時に、是等年寄の妙な考へを調べる必要もあらうと思ふ。お爺さんお婆さん中々に食へぬものであるのだ。

本書中、社會に於ける將校の地位見識に就て色々述べた所があるが、茲でも一つ置いて置きたいのは、地方の人の眼識が進んで來たので、將校連が之は吾

人の領分であるを信じて、杜撰な廣言を吐くと、飛んでもない揚足を取られるのみか、將校の眞價を傷けるに至ることである。是等も將校が地方人士の智識の範圍と程度を考へぬ所から來るので、研究考慮の足らぬ結果である。之は随分あることであるが、今、最近の例として、本年九月の中央公論に載つてゐた評論文の一節をあげて見やう。

或軍人は曰く、山東省を取つた所が軍事上格別の必要を感じないと、コンな馬鹿な事を言ふ。軍人は、支那の事を語る資格はないと謂つて宜しい。

方々の隊で演習地に關係のある戰國時代の講話案を作ることがある。夫れが爲めにはかなり廣く參考の書籍を涉獵して、精確なる材料を集めるは勿論なので、出來上つた所、一見立派な講話案である。之が講話者も得意になつて講話をするが、扱後日或機會で之を其土地の歴史專攻者が見ると、全然年代なる觀念が缺けて居る。其一例には甚だしきは百年も違つたものを一所に集めて論じて居るので、呆れて物が言へぬといつた話を耳にした。いくら戦史は軍人

の研究領分とはいひながら、是等は地方専門家の説にも聽かねばならぬ所なので、軍人が動もすれば、我田引水的又自家撞着の所作に陥るといふ好適例であらう。

市街又は町村に軍隊の宿營することを段々地方人が喜ばなくなることは、誰もかも感附いて居る事であつて、何とか工夫をせねばならぬ件であるが、殊に將校宿舍となるのを好まぬといふ、面白い事柄がある。之は將校宿舍となれば、いやでも餘分の饗應もせねばならず、設備用意もいるし、何かにつけて面倒である、而も折角好意を以て迎へ、種々御馳走をして出發した後は野となれ山となれ、將校の四五人も厄介になりながら、禮状の一本も寄越さぬといふので、流石の舍主も、其禮儀を知らぬのを憤り、爾後一切將校の宿舍たることは斷らう、そして國の爲め國民の中から徵集される一兵卒を世話する方が寧ろ心持がよいといふ氣分になる。そんな話を耳にした、切棄御免では今は通らぬ、否昔でさへ、禮儀なるものは四民の上に立つ武士は一層心掛けたものだ。

趣味と社交

日々の演習に趣味を有たず、只空々として動いてゐる將校は恐らくあるまい、併しながら之とても眞に深い趣味を有つてやつてゐるものは、十人が十人迄然うとはいへぬと思ふ、眞に深い趣味を有つてゐるものには、必ずや、何か着眼の特色がなくてはならぬ、何か工夫の上の見附處のあるものなのである。營々として體を使ふ丈で、何等進歩に貢獻する所がないとすれば、餘りに素氣ないものではなからうか。

當面の職務に不忠實な者はないのであるが、趣味の深淺丈は別問題である。趣味を感じるからやる、趣味を感じぬから勉強しないといふことがあつては大變であるが、之を以て趣味なるものゝ如何を問ふ必要がないと論斷するものがあれば、夫れこそ愚の骨頂である。

趣味なるものが仕事を爲す第一義ではないが、仕事を爲す手傳ひとなるこ

とが甚多い、仕事の種類によつては、其人の趣味の如何が成績を左右することも珍らしくない。

かなり舊い予の作ではあるが左に掲げてみやう。

『今や世は滔々として利に慧く、義に疎く、巧を小事に弄して大局の達観を忘れ、愚痴ボキ男のみありて眞に安心立命を得たる者なく、一方にはハイカラ風起り女子の態を學んで懦弱となり、誇榮の氣、虚飾の弊漸く瀾漫せんとす、國民一般に趣味の低下せしことは事實にして、社會には品格なく主義なく、只夫れ俗氣紛々として近づくべからず、頃者某氏の論を讀み大に我意を強うせり、予輩亦思ふ所あり少しく之を説かん。』

趣味とは利害の觀念に超絶し事物の眞正の價値を感じる感情なりと謂ふを得べし。

感情は知的作用の上に在り、例へば繪畫に對するとき、其色彩は直に吾人の眼に映す、是知覺の作用なり、然れども之を觀て快苦の情を起すは一步を進

めたるもの、更に其美點を認め悠々として楽しむ所あるは其又上に屬す、此階級の上には即ち趣味の殿堂あるなり。

感情は意的作用の上に在り、例へば富士山に登らんとするは願望なり、之を實行するは意志なり、登り得て我脚力の強きを信じ、日本の名山に登り得たりと思ひ遙かに十三州の眺望を恣にして、心頗る愉快となるは是趣味の致す所なり。

吾人は知的・意的・兩作用によりて生き、感情ありて動き、趣味ありて始めて高尚なる生活の意義あり、而も意的作用は總ての高等動物に見る所、人の萬物に長たる所以は靈智にあれども亦趣味ある所にも存することを忘るべからず。

趣味は只感情によりて楽しむなり、故に嗜好と最親密なり、上戸は醉中に趣味を解し、下戸は牡丹餅に趣味を有つ、即ち趣味は人によりて千差萬別なり、是やがて弊風の存する所なり、所謂天才者には大なる趣味あるを常とすれ

ごも、大なる不具的性情も亦多く、天才の所有なるを知らずや、趣味を有てば、さて馬鹿な真似をなすは既に道徳を無視せるもの、余輩は大に趣味を有つべきを主張すると同時に、豫め其是非を理性によりて判別せざるべからざるを言はんとす。

理性に濾過せられざるの趣味は未だ以て道徳に貢献するに足らず、是盲目なればなり、其精神的たるを物質的たるを問はず盲目なるが故に責任なし。只夫れ盲目的趣味は其度を過ぎざる所に生命あり、動もすれば本能主義に陥るは其弊害の顯著なるものなり、即ち趣味は人をして向上せしめ、又一步下りて人をして醉生夢死せしむ、其益のある所に害の潜むあり。

誤解する勿れ、理性といはゞ血性なきやうに考ふる人もあらむが、決して然らず。趣味も理性に伴ひて始めて艱苦缺乏に耐へ、勇むで水火の中に入り、不義に怒り、國家人道の爲めに戦ふを得るなり。予輩は此道徳に關する理性的趣味を倫理的情操といはんとす。見よ彼のサラミスの海戦に際しエスキロ

スが進めヘレニスの子等よ、何事も今は汝等が一戦に繋れりと絶叫して、千餘に充てる波斯艦隊に、三百に足たぬ希臘艦隊を鼓舞して當り、朝に壯大を極めし彼等を夕に隻影だも留めざらしめしことを、又英國がウエルスの一小國を攻むるに方り、詩人ありて其國民の士氣を鼓吹し、英爲めに艱難を極め、遂に其詩人を殺して始めて之を破り得たることを誰か之を以て快心の事として嘆美せざる者ぞ、何ぞ趣味の高くして貴きや、若し夫れ理性的趣味が信仰を構成するに至つては、半乎として復抜くべからず、主義事業の人に、は此信仰なかるべからず、彼の浮薄の徒に真率なく、熱誠なく、情懷なく、信する所なく、主義なきは抑、理性的趣味に於て缺くればなり。

前言某氏の說中「純化せられざる感情」修養せられざる感情の語も畢竟此理性的趣味なりと解する、誤まらざるに遡らんか。」

仕事以外に離れて、廣義に於ける趣味性につき、予の觀察では、將校が未だ々々一般に幼稚であり、甚低いやうである。讀書の趣味は如何、典範令研究の趣

味すら怪しい、元來趣味に乏しい典範令といふかも知れぬが、それは間違つてゐやう。其他の参考書を眞に趣味を有つて讀んでゐる將校は果して何人あらうか。陸奥宗光伯であつたか、固圀の中で讀破人間書萬卷と氣焰を揚げてゐる西郷南洲翁は大島流謫の際、精神修養の書籍を耽讀した。

讀書の趣味に乏しい將校は、活眼を以て活書を讀むといふ域には到底達し得られぬであらう。

讀書の趣味のないものは之から先き、品格を高め、智識を汎く且深く求めることは斷じて出來ぬ。

あゝ、趣味なき將校は、智識を求めずに、寐ることと食ふこととの爲めに、半生を徒費せんとしてゐるのではなからうか。危い哉。

讀書の趣味は讀書癖から進んで行つて、自獲自得せねばならぬ。書物を讀む癖をつけるのが第一である。

誰しも、偶には書物を讀まうといふ欲求の起る筈のものではないか。此欲求を適當に助長させて、趣味を構成したいものである。

讀書の欲求につき、下らぬ子が日記の一節を御覽に入れて、諸彦の斯かる刹那の經驗に冥會させたいと思ふ、我人共に凭んな感じが時々起るものであらう。

雨を得るの記

八ヶ嶽裾野で一週間の戦闘射撃を終へて歸つた。

夜行軍の疲れきつた脚を伸ばして寢臺に横はつて居る中に深い眠りに入つた。夢など見る餘裕のない疲労の後の熟睡であつた。

目が覺めたのが午後一時、細雨がシト／＼と降つて、窓硝子が粉をふり掛けたりやうに、ポーツとして濕つてゐた。

床の中で、自分は兩手を思ふさま突伸ばしてから頭を掻いた、少し伸びた頭の毛がフワリと手に觸れて、腦が濾された後のやうにスガ／＼しさを感じた。

起きて便所に行く、屈みながら引窓から静かな落付いた雨の音を聞いて、何となく楽しくなつた。

室へ返つて先づ、煙草を喫ふ。喉が柔かく穏やかに煙を通すにつれて、胸を膨かせては愉快にも丸まつた濃い煙を口から悠々と吹き出す。肘布圍をつきながら三四分は恣うして、ウツトリとしてゐた。

勞働は確かに神聖にして且貴重なものだ、一週間八ヶ嶽裾野を駆けずり廻つて汗水たらして働らいたのだが……。

山は流石に偉大なものだ、其懷に一個大隊の戦闘射撃を悠揚として實施せしめる。浪のやうに流れてゐる山稜と山稜との間に、鐵を溶かしたやうな水の冷たいこと、其谿川が處々石に堰かれては、野薔薇の重たい香を吹いてゐる。又銃線が日に閃めいてゐる下に、桔梗が二三輪咲いて、傍には女郎花が眞晝の空氣の中に淡く浮いて見える。時々發射される銃聲が一所になつてサーツと山に打つかると、反響は山脚の森林へ跳ね下つて、何百萬株の林の木

を震はせる——それが空氣に傳はつてゴーツと擴がるかと思ふと、山頂を隠した白い雲の中に吸ひ取られるやうに消える。

凭んな事を思ひ起すうちにも、體と頭がいかに安まつて來た、ウンと一息腹を出して又胸を反らせて、振回へつて窓の方を見つめて、さて雨といふことを考へて、知らず識らず感謝の念が湧いた。

讀書の日よ——と。

窓外の雨塵を消す雨休まつた頭、新鮮な頭。

落付いて讀書の出来る日といふ愉快な感がムラ／＼と起つて來たのである。

(四十二年警内居住の時の日誌より)

讀書の趣味に關しては、尙別章「新時代の修養」廣く眼を地方に放てを参照されたい。

軍人が武骨一逼で通るものではなく、武備ある者は文備がなくはならぬ。此文なるものは文學の文、文章の文でなく、孔子の所謂「行有餘、則學文」の文であ

つて、武事以外の智識、見識、作法等を廣く意味するのである。

其他娯樂の方の趣味については茲に詳しくいふ必要はなからう。娯樂も何か一つ二つの心得はあつて差支へない。予は將校の頭腦が低い所から趣味をいへば多く娯樂の方面のことに關係するやうに思ふ向が多いのを、寧ろ慨かしくは感ずるのである。娯樂は一の餘技に過ぎぬ。娯樂の多いのを誇りとするは馬鹿氣た事で、實益上の價値を認められぬ。之に反し予の主張する趣味の培養は、實質ある研究の光耀を附け、更に局處に偏せぬ。廣く深い智識と高い立派な見識を進める所以についていふてをるのであるから誤解しては困る。

武田信玄といへば、人は戰國時代の梟雄と思ふけれども、事實信玄の言行を研究して見ると、決して非道の豪傑でなく、血もあり涙もある英雄である。信玄を中心として其時代武田の名將の談片を輯録した石水寺物語(石水寺には信玄の本城があつて、よく此所へ赴いては近臣を)に『或夜の事なるが、信玄公御話衆その外の者集めて信玄が譚をいたはる』などの佳話がある。へお尋ねたまふ工夫と思案とは別か同じきかと、諸(うろ)の中に長坂長閑一つの事

なりと申上ぐ、信玄公の御誕には「それは別なり、古語に工夫乾坤通幽微、思案唯心在好望所」と云ふ、即ち工夫と思案とは少し違ふなり」となどの佳話がある。

其外信玄の吟詠になる詩歌は數百首の上に出で、をりをり、中々の秀逸がある。又信玄は書畫共に堪能であつた。

此事柄は會、信玄の趣味性に富んでをつたのを窺ふに足るばかりでなく、其深い趣味によつて如何に信玄が人格を高め、威壓にあらずして眞に人をして心服せしめ、急かす躰はず國治に努め、外征に際しては常に無暴の仕打を避け、てよく時機の至るに投じたといふ信玄總ての行事に修養の實效を收め得るに與つて力のあつた事を感じずには居られぬのである。疾如風、侵略如火とは固より英雄の果敢斷行ではあるが、一方には靜如林、不動如山なる圓滿にして確乎たる舉措は只慄悍なる梟雄の能くする所でなく、內的修養を経た偉人の態であつて、悠揚として迫らず總てを包容した大器量に待たねばならぬ。此點に於て信玄の傑出せる事を認めて來ると、彼が如何に大なる見識を有したか

い・分・り・其・趣・味・性・の・深・く・し・て・萬・事・に・通・ず・る・を・得・た・消・息・を・了・得・す・る・こ・と・が・出・來・
 や・う・
 那・翁・は・あ・の・計・算・的・な・頭・腦・の・人・で・あ・つ・て・モ・ス・ク・ワ・陣・中・繁・忙・の・間・に・戲・曲・を・論・
 じ・た・こ・と・さ・へ・あ・る・趣・味・を・有・す・る・人・は・如・何・に・美・は・し・い・餘・裕・が・あ・り・何・と・も・言・へ・
 め・情・懷・の・發・露・が・斯・く・ま・で・人・を・欣・慕・さ・せ・る・こ・と・を・思・へ・ば・武・骨・一・遍・馬・車・馬・的・な・
 る・軍・人・の・淺・い・々・々・處・が・耻・か・し・く・は・な・ら・ぬ・も・の・か・
 趣・味・の・必・要・と・い・ふ・こ・と・を・一・通・り・述・べ・て・來・た・が・一・步・を・進・め・て・之・を・吾・人・の・仕・
 事・と・か・研・究・以・外・に・社・交・と・い・ふ・方・面・に・於・け・る・關・係・を・見・や・う・
 若・き・士・官・が・社・交・を・云・々・す・る・こ・と・は・贊・成・す・べ・き・で・な・い・自・己・修・養・時・代・に・徒・に・
 所・謂・お・上・手・を・覺・え・る・の・は・禁・物・で・あ・る・
 併・し・な・が・ら・若・き・士・官・と・て・も・社・交・が・な・い・か・と・い・ふ・に・決・し・て・然・う・で・な・く・隨・所・
 に・世・間・と・接・せ・ね・ば・な・ら・ぬ・只・社・交・と・い・ふ・問・題・を・深・入・り・し・て・考・へ・ぬ・丈・の・話・で・あ・
 る・

又・い・\・年・配・の・所・謂・老・巧・の・將・校・に・あ・つ・て・は・社・交・と・い・ふ・こ・と・を・考・へ・て・其・間・に・
 見・識・を・保・つ・て・行・き・得・る・か・と・い・ふ・と・甚・覺・束・不・い・次・第・で・あ・る・
 予・が・茲・に・社・交・に・關・係・し・た・一・端・の・說・を・な・す・の・は・若・き・士・官・に・向・つ・て・言・ふ・の・が・
 眞・意・で・は・な・く・將・校・一・般・に・向・て・苦・言・を・呈・す・る・の・で・あ・る・
 軍・人・と・社・會・と・は・餘・り・に・密・接・し・た・く・な・い・が・將・校・は・國・民・の・儀・表・た・る・べ・く・少・く・
 も・軍・人・精・神・維・持・の・中・樞・者・で・あ・る・こ・と・は・吾・人・の・誇・り・で・は・な・い・か・此・儀・表・と・な・り・
 中・樞・者・た・ら・ん・者・が・其・對・象・た・る・社・會・を・知・ら・ず・に・御・山・の・大・將・を・極・め・込・む・の・は・甚・
 可・笑・し・い・こ・と・で・あ・る・榮・根・譚・は・此・關・係・を・面・白・く・說・明・し・て・あ・る・曰・く・勢・利・紛・華・不・
 近・者・爲・潔・近・之・而・不・染・者・爲・尤・潔・智・械・機・巧・不・知・者・爲・高・知・之・以・不・用・者・爲・尤・高・故・に・
 社・會・と・沒・交・渉・で・い・\・の・社・交・に・氣・を・配・る・必・要・が・な・い・と・い・ふ・の・は・丁・度・社・會・を・知・
 ら・ぬ・世・間・を・研・究・せ・ぬ・と・白・狀・す・る・や・う・な・も・の・で・凭・ん・な・苦・しい・負・惜・み・は・あ・る・ま・
 い・
 然・う・し・た・議・論・は・一・先・づ・差・置・い・た・に・し・た・所・が・實・際・に・於・て・將・校・は・公・會・の・席・へ・

出ることもあり、種々な場處に臨むで世間の人に對つて口をきくのである。即ち嫌でも應でも將校として社會に觸接する機會がある。

此時である。將校の見識、人爲、研究、趣味性の程度が世間の批判に上るのは此時である。

單に武骨一遍、社交場裡の赤兒たらずんば幸である。單に武骨一遍、學界藝術界の名士に接して一片の應對辭に苦しむことがなければ結構である。

趣味については誠に簡單であり、低級である。將校は軍人社會以外に出で、零となるのでは、餘りに心細い譯である。世間に向つて國軍の主義を鼓吹するにした所が、世間の人を魅し、槍縱自在、之を掌中に弄するやうな手腕がなければ、到底目的は達せられぬ。倍以上の力がなくては人の師たることは出来ぬ。すれば、簡單低級自ら善しと甘んずる。其手緩るいやり方で、將校の見識を世間に押移すことが出来るものでないことが判る。

況んや、然く堅苦しい場合でなく、打解けて人と接する廣義の社交にあつて

將校其人の趣味性の低いのを到る處で暴露して、嘲笑を買ふ場合が往々あるのを思ふと、決して迂濶には過ぎぬのである。

趣味性の發露と社交問題との關係は所謂「上手」とは全く別物なので、時として人に逆らつても自己の見識を通さねばならぬことがある。雷同阿附でなくして、知己を千載の後に求めるといふ氣概に出づる場合もあるのである。此章を読む人は特に茲に注意されたいのである。言ひ換へれば、社交の手腕は、お上手にありと解してゐるやうな簡單なことでは、與に語るに足らぬと予は考へてをる。

序に言ふて置きたいのは、將校が閑暇を利用して、地方の各専門家を訪問して談話を交へ、其意見を聴き、以て自己の識量を進めるといふ潤達な所のないのは、甚遺憾なことで、之も多くは趣味性に乏しいのが原因して、頓と其處には氣が至らぬからであらうと思ふ。己を空うして人の説を容れる度量を備へ、智識の涵養、人格の向上につき、一刻も停滯せず、一時も逡巡せず、常にその欲求に

對し心身の培養に怠らぬ人は須らく名士を訪問すべし。上官を訪問するのは勿論いゝが、更に軍人以外の名士に接して、遠慮なく智識の吸収をやることを御勧めする。請ふ見よ、維新當時の志士は天下を歩行して同志を求めたではないか。

淡 的 生 活

「醜肥辛甘非真味。真味只是淡。」とは菜根譚中の警句である。蕪村は更に雅致ある句を以て提撕してゐる。

涼しさや鐘をはふるゝかねの聲

恐らく此等の言句の真髓に悟入し得た時は、脩養の極處に達したといふべきであらう。併しながら悟入し得ざる迄も味ひ味ふ必要はあるのである。

『熊澤了介先生の家懸物僅に二幅あり、一は源延尉弓流しの圖也、二は筑波山葉山、葦山番けれど思入るにはさはらざりけり』の歌なり、並に深く自ら警戒せらるる所あり、其他絶て一幅なし

こぞ實に後學の景仰すべきこと也、余亦器物書畫に於て素より嗜好あることなし、然れども蘇東坡寶繪堂記に「譬之煙雲之過眼、百鳥之感耳、豈不欣然接之去而不復念也」の語に至ては甚吾心に合す、白樂天詩に「亦莫戀此身、萬劫煩惱根、亦莫厭一聚虛空塵、」云も、同一の見解なり、武士たるもの此見解なくしては討死は出來ぬなり、而して俗士乃ち器物書畫さへ念慮に横はる位にて、安ぞ煩惱虛空の眞理を了悟するを得んや、(武教講録卷之十、衣食住の部の一節)

「士志於道、愧弊衣惡食者、未以足與語也、」で修養の道程にある者は、常に此淡泊な純粹な氣分を以て進まねばならぬ。

机の上には三つ四つ置物的な裝飾品が並べてある。筆立などは中々氣取つたものだ、ハイカラなアルバムが側に積まれてある。泰西名畫の奇麗な印刷畫が立派な金縁の小枠に入れて掛つてゐる。肘着きの派手なのがおとなしく一角に据はつてをり、其前には本立の光澤々々しいのが置かれ、側の硝子張りの書棚には、背革やクロスで金文字入りの書物が行儀よく並んでゐる。柱には型の如く絹の房の附いた掛鏡が調和されぬ物の色を反射させてゐる、といふ始末で要するに狭い室の中は雜然として器材に充ちてゐる。——之が將校の

書齋である。

若き士官は、朝晩二三回は必ず鏡の前に立つが、机に對するのは只靠掛る爲めなので、この時は専ら手持無沙汰であるが、欠伸をする時か、煙草を喫ふ時かである。書棚の整頓されてゐるのは、滅多に本をいちらぬからで、書物の中には「〇〇藏書」と印判を捺されてから、二三年この方塾居を仰付かつたなりがある。

器具や裝飾の多いのは、會若き士官の好奇心を表象するものであつて、一種の執着であり、煩惱根の現示である。

夜間演習が済んで、晩くなつて返つて來る、室は眞暗である、仕方なしに匍擦廻つて、手搜りで燐寸を索してランプをつける、電球なら捻る丈で何等の世話はいらぬ、……やつと明るくはなつたが、扱六疊の一室に空しく夜の空氣を圍むで居るだけで、正に空漠たるものだ、本尊もそれに伴つて、暫くは茫然としてゐる、といつて無爲にして化することも出來ぬので、押入から夜具蒲團を引

淡的の眞味

擦り出して伸べる、煎餅式の蒲團一枚、かなり冷やかである、坊主枕を轉がして、ヤツコラサ、ヤレ、脚をウンと伸して、欠伸の一つもする中に前後も知らず寢入つてしまふ。——何等の構付けるものもない所に、如何に淡的の眞味がある、恐らくは這般の消息は、若き士官の獨占する境遇であらう。

係累のない、制肘のない、活天地に呼吸する吾人の生活は、實に愉快なものではあるまいか。

外物に氣を移さぬことは、心氣鍛練の第一歩である、若き者の係累のない内が花である、宜しく心氣を練つて充實せる内的生活をなすべきである、處が若うして既に物に物されつゝ、ある人の眞に緊張し、眞に充實せる生活を送ることを得ぬ状態を、吾人は甚遺憾としてをるのである。

更に歩を進めて言へば、随分多忙であり、隨て頭を使ひ、體を勞し、心身殆ど餘裕のない活動を續けてゐるのが吾人である、此活動は、纏て吾人の誇りである、而も此活動の裡に相對的に淡的の生活が配合されるので面白いのである、人間

吾人の誇

は局處々々に於て單純なものでなく、迷はずに斷行の出来る所以は此にある、餘處に氣を引かれずに、自己の本領を發揮し、目的を遂行する、斯くして出でては活動となり、入りては何等屈托のない、淡的生活となる、正に動中靜の現象である、是に於てか既に一家を編成せる者、夥多の係累を有する人には益、淡的生活の必要を認めざるを得ぬ。

日露戰役に於ける我軍の勝因は種々あるのであるが、其中の一つとして、日本將校の質素にして、困苦缺乏に耐へたといふことも、動かすべからざることになつてゐる、是は具眼者の齊しく認むる所である、衣食住に關し、常に身を戰時の不自由なるに思ひ比べて、平時の修養とした、日本戰國時代の武士の心根は、二十世紀文明の世にも、移して範となすべきで、身心鍛鍊の根本義に於て少しも更りはないのである、慘憺たる戰鬪場裡、缺乏勝ちなる給養に甘んじ、飢に克ち、居に堪えて行くもので、始めて捷利の月桂冠を得られる、彼の贅澤な暮しに馴れた、飽食暖衣の徒では、やつて行けるものであるまい、居は人の心を徒す

で、平素簡易生活を送る日本將校は、困苦缺乏、氣候の變化に遇うても、格別精神上肉體上共に打撃を蒙らぬ、眞に是良戦手と謂ふべきである。

最近歐洲戰爭に於て、リエージュ攻圍戰中、獨軍の將校が發狂して部下と共に投身したとの電報は、吾人をしてはからずも、形式に流れたる國軍幹部の變に處する心理の實相を窺はしめた、憐れむべきではないか。

世の進運に伴ひ、日本人の生活程度も追々高まり、家庭の内、外共に贅澤となり、殆ど世相上、士家の體面として、人に笑はれぬ様、居を構へ、身なりを装ひ、食物を選び、遊樂の途には必ず交通機關を利用して、身體を使ふのを避けるを、經濟と考へる有様である、随つて兒女は此間に軟教育を受けて、人形然と育成される、遂には剛健の氣風を吹込まれる機會だになきに至るかも知れぬ、世の進歩と共に幾分生活上の面目が改まることは已むを得ぬこと、は云ひながら、勤儉質實の美風を家憲とし、直接の生活は全く簡素を旨とし、剛健努力の氣風は父母の意氣より家人に傳はり、堅固なる一家を作り、堅固なる國民となり、堅固

なる國家となつて行くことは、決して背理ではない。

一步を譲つて、少くも將校の家庭にあつては、家人舉つて精神上のこゝろを厚くし、物質上のこゝろは薄くするの風習を持続せねばならぬ。淡・的・生・活は、武・士・家・庭の形・容・詞・で・あ・り、又・代・名・詞・で・あ・る・こゝろ。風・な・ら・ば・如・何・に・奥・床・か・し・い・こゝろ・で・あ・ら・う。

吾人を以て無闇に粗野乃至蠻的生活を主張するものと誤解しては困る。

齊藤別當實盛が白髪を染め、木村長門が蘭麝香を焚き込めたといふ身嗜みは、美はしき祖先以來の遺風である。平時に必要な香料も、戦時死出の戦場に響ることの如何にかぐはしく、太平無事の時の飾なき佩刀も、有事の日には黄金造りたるを妨げぬ、神州武士の美風は正に武骨一遍ではない、綽々として餘裕を示してゐるのである。

將校中金時計を持ち、金指環を嵌めてゐるものが段々殖えるやうであるが、唾棄すべき現象であらう、此等が物に物せられてゐる輩で、イザと云ふ場合に日出國の名寶たる日本刀を振りまはせぬ連中である。

武士の心掛けに就いて或禪家の高僧が評して言うた、軍人は號令一下、水火尙辭せず、尋常人の出来ぬ川渡りもやる、炎熱中の強行軍もやる、随分無理を押して動作する、上官も又強て之を要求する、かと思ふと一方では風邪をひく、な、腹を冷すな、水を呑むな、など、細かい所まで注意を加へて、體を大切にし、着物に注意し、食物に氣を附ける、一見誠に矛盾するやうであるが、是、臆・て・禪・機・に・一・致・し・た・も・の、此・心・掛・け・こゝろ・は・向・上・不・退・轉・で、物・事・を・遂・行・し・て・遺・憾・な・き・を・期・し・得・る・素・地・で・あ・る。」

高尚なる見識を蓄へつゝある武人が、恬然として淡的生活を送り、我本領は此に在りと自認して而も奇を衒はぬ所に、無量の味があるのである。

陸と海

汪洋たるは海である、屈起嵯峨たるが陸である。

海が汪洋として空を浸すに反し、種々雑多な凹凸があり、色々の物に充たさ

れてゐる陸のコセ／＼せるを見よ。

之を推して、直に陸軍及海軍に當て嵌めるのは無理かも知れぬが、少くも其氣分に於て之に類してゐやうと思ふ。海軍々人は悠揚ゆうやうとしてをり、陸軍々人はコセ／＼してムサ苦しい感じがありはせぬか、飾り氣がなくて而も何處か瀟洒でありハイカラである海軍と、重々しく仰山な中に、何處かに穢きたならしい所のある陸軍は、單に服裝の感じばかりでなく、言語、動作の上にも其氣分は濛つてをらぬか。

海軍々人は鷹揚であり、陸軍々人はどうもゴツ／＼して窮屈であることは、生活に支配さるゝ所が多いと思ふ。海上生活の勞苦も勿論多からうが、悠々とした水天髣髴の景物は自ら海軍々人を化育せずんば已むまい。陸軍々人には此生活のゆとりがないから常に壓迫を受くる感情が凡てを支配し、凡てに表現さるゝやうになる。

陸軍々人の一局所に固着して、演習勤務を繰返すのに反し、轉々航路を更

へて、或は遠く外洋に航海し、或は歐米諸邦を歴訪する等は、全くコントラクテしてゐる。随つて智識頭腦の範圍に於て、大なる逕庭が生ずることとなる。此意味に於て、陸軍は偏狭であり、海軍は濶達であるといへる。

予は陸軍將校として、横須賀鎮守府を訪ひ、又軍港軍艦の觀覽をなしたことが二三度あるが、先づ感じたのは海軍將校の應對振りであつた。陸軍將校の人に遇つて、碌々口もきゝ得ぬ、固陋ころうなのに反し、海軍將校の悠揚として迫らざる。接對は確かに紳士風である。又外來人に就て便宜を圖る點に於ても、遙かに行届いてゐるやに見受けた。ある時軍艦を見せて貰つて、規定の時間よりも晩くなつてしまつたが、巡覽が終つてから一室に通されて、悠然話を交へ、茶菓の饗應になつて、扱軍港の通用門が既に閉まつてゐるといふので、用意の小蒸汽で送られ、軍港の阜頭に着いて、握手して海軍將校に別れた愉快なる記憶を明確なる印象と共に、予は有つてをる。一寸陸軍には眞似の出來ぬ圖であらう。

吾人は、陸軍將校が人に接して大に語り、巧に陸軍を紹介し、寧ろ開放的に應

對して快感を興へることを學ばねばならぬといふことを、痛切に感じてゐる。其次に吾人の考へてゐるのは、海軍々人には深く研究してゐる人が多いやうに思はれることだ。是は遠洋航海とかいふ、纏まつた暇のある賜でもあらうが、浦山敷事である。専門の事は勿論、其以外に精神修養の材料たるべき事柄については、随分意外な所に眼を着けて、深遠なる研究を遂げて、其道の専攻者をして舌を卷かしむるものがある。彼の日蓮主義の研究家として八代中將、佐藤少將、小笠原大佐があり、八代中將は更にオイケン哲學の研究者で、佐藤少將は其著國防史論で發表してゐる國體觀及武備論の如き、何れも徹底しぬいた人達である。此等の人々の研究が、那邊に迄及んでゐるか、と搜つたならば、陸軍將校は恐らく驚嘆し、二の句が次げぬであらうと思ふ。海軍將校の著作に有名なものが多いのを見て、其一般がわかる。陸軍將校に至つては、廣く世人を益し、眞に自己の開拓したといふ著作が一つだにないか。之も一つには著述等に對する壓迫、拘束のあることが、一大原因をなしてゐる。もしやうが、要するに

將校其人の研究に甚だしき深淺があるからで、此點からいうて、陸軍々人は海軍々人に對し慚愧の至りである。進歩主義であり、學究的なる海軍將校の態度は、是亦大に學ぶべきである。序でに言うて置くのは、陸軍將校は餘りに現金である。利那主義である。つまり固陋であるせい、か、當面以外の研究をせぬのは遺憾である。之が進歩せぬ所以であらうと思はれる。餘計な所に手を出す勇氣と見識とがないのである。餘計な所に手を出すことは忌むべき邪道である。と云ふかも知れぬが、焉ぞ知らん、餘計なこと、思つて居ることが、移して來ると大益をなす事があるのである。之を看破するのが著眼であり、見識である。此事は別章「新時代の修養」中に論じてあるから参照されたい。

此研究の材料、手段及時間は、陸軍だとしてかなりに得られるのであり、材料、手段の如きは、陸上に棲息する者に多大の便宜があるのであるから、上級者が却つて之を獎勵するやうになつてほしいものである。

偏狭なる範圍に蠢動してゐる陸軍々人は、先づ氣宇を大にし、眼界を廣くし、潤達なる氣分を養ひ、人に接し、己を處し、研究に身を委ぬる各種の方面に於て開放的に、見るから快活に物事をやつてのける風習を附ける必要がある、吾人が一途に海軍を讚して陸軍を貶するものでないといふ眞意を了解せねばならぬ。

少年行

御嶽の秋

ある年、飄然吟節を曳いて、甲州御嶽の秋を訪ふたことがある。

甲州の御嶽といへば、金峰山より發する荒川の上流地で、其潤溪一帶の地を昇仙峽と呼び、かなり名の知られた勝區である。

春は雜木山の若芽おもしろく、溪流に映する吐鵝花の眺めは亦一入はであり、夏は清冽の水に塵垢の思を洗ふべく、秋は霜葉黃玉紅珠の錦を飾り、滿山燃ゆるかとおもふばかり、冬は空山雪景に風流人士の足を引附けてゐる。

甲府の街より約五里、和田峠を経るものと、吉澤村よりするものとの二道があり、五里の中の四里は全くの山路で、遠く都市の塵寰から脱して居る、殊に秋の御嶽は深く行けば行く程、天來の神韻、閑寂の清趣に魅せられるかと思ふ様である。

昇仙峽の勝區は、天神森下の長潭ながたんより仙娥瀧に至る約一里の間である。

怒つては水晶を碎き、泳つては碧玉ともならむ水の姿は、鮮やかとも何ともいひ様がない、氣高く澄むだ白雲黃葉の天地の間に、一潤の水は正に秋の色を湛えつゝある、更に之を聞けば其響にも天地の秋は韻せられてある。

金溪館を過ぐれば景色は頓に宏大となり、覺圓峯から吹下ろす冷氣の間、吐虹の奔湍が白き日を受けて輝いてをる一方、暗き石門をくゞつて、人は昇仙橋に掛る。

道少して迂曲して上れば、忽然右に方りて鞆々たる響を聞き、仙娥瀧の偉觀に接するのである。

巨巖の中に開けたる二十間四方許りの處を領して、雪崩れ落つる金溪の水は、全く細沫と化して數丈の紫岩壁をつんざく勢を示して瀉下し、忽ち又色を更へて碧綠凝らんばかりの潭となつて渦きつゝある、其渦の皺の背には眞紅のもみぢがてり添うて、寧ろ物凄しい程である。

路傍の岩の間を縫つて、下り立つて瀧に對す。

眼を移して見ると、左の方岩峭の罅隙に二人の少年が蹲まつて居る、何をして居るのかと、好奇心を起して近寄つて見るに、二人は甲府中學校の幼き生徒で、年の頃は十三四、專念に肴を焼いて居るのであつた。

面白さに儂の方から聲を掛けると、二少年は振向きざま笑顔を作つて心置きなく應對した、儂は早くも親友となつて側の石の上に腰を下ろして話を始めた。

少年は何れも中學一年生である、昨土曜日放課後、親しき仲の二人は相談して、御嶽行を計畫した、早速鍋、水筒、鐘詰、米、肴などを用意して發足し、其晩は吉澤

の附近に露營し、外套にくるまり二人相擁して山中に眠つた、今朝は早々行を續けて今此處に到着し、晝飯をやらうとして居る所なのである。

見ると飯は既に鍋一つ宛に炊かれてゐたので、肴が出来る、石を組み立てた其急造竈に相對し、之に鐘詰の肉を附け足して、鍋と肴をつゝき始めた、箸は近所から切つて來た木の枝、紅葉のやうな手に夫を取つて、

嗚呼、好個の食卓！仙娥瀧を前にし、上に楓樹の天井を有つた大なる自然の食堂に、紫色の花崗岩を膳として、楽しく空腹の舌鼓を打つ——傍の見る目も羨やましいばかりである。

犬一匹、暗き蔭にかゝんで居たのが、此時鼻を蠢めかして、主人公の食卓を襲ひ、荐りに空腹を訴へる有様である、少年の一人は片手を伸して、之を抑へながら依然箸を運ぶ、「お前は後からだよ、夫でも鐘詰の肉、一片又一片はせめても犬の食慾を紛らすべく投げられた、マア之でも喰つて居れ」

主人公の食事が済むと、犬はかなりに餘つた鍋の飯と、残りの肴を與へられ

尾を搖がして快く喰うた。少年の一人は、其自家の飼犬を山地旅行の伴侶として連れて來たのである。

何處迄行くのかと聞けば、御嶽の金櫻神社迄行つて、今日中に歸るのだと秋天清く晴れた休息日、一泊の自炊露營旅行を試むる少年の意氣や寔に欣ぶべきである、而も金櫻社迄の往復は少年の脚力に對しては、かなりの道程なのである。

儂は仍で、少年所有のスケッチブックに、仙娥瀧を、背景とせる二少年晝食の圖を描き、尙仙娥瀧丈けの寫生を添へて、紀念の爲めに贈つた處喜ぶと限りなく、別れに臨むで、ポケットから百目柿一つを取出して、如何か一つですが取つておいて下さい」と儂に差出す、君等の好意は實に嬉しいが、折角の携帶糧食を君達から巻き上げるのに忍びぬ」と辭したが、如何しても進上するといふので、其眞情を受け、換りに儂の携帶囊から胡挑入りの金米糖一袋を出して贈つた。儂は此二少年の旅次安かれと祈りつゝ、別れて先きに出發した、彼等は荷物

産得難い土

を整へて、後から追付きますと言つて居つたが、小供の足のこと、遂に儂と一處にはなれず、儂は歸途を裏山に取つて、飽くばかり御嶽の秋の清氣を呼吸して家路に就いた。

一日の御嶽行、計らずも喜ぶべき少年の行動を目撃したのは、復得難い土産だつたと、今だに思つて居る。

足野の遠

日本の少年に關する體育に就いては、予は從來甚遺憾の點の少からぬを感じて居る。殊に學校は扱て置き、家庭の内外に於て然うである。危険に對する監督といふことは固より必要ではあるが、つまらぬ戲をさせるよりも、野外の遠足を獎勵するのが一番いゝ、仕度は簡單で事足るし、自然の裡に彼等の氣宇を大ならしめ、外界の事物に對する研究心を誘發し、知らず識らず忍耐持久の精神と自ら己の處置をする氣風を養成し、單に脚力のみならず、身體全部の運動になる、最、大國民的の行事であらうと思ふ。學校では計畫しきれぬ遠足會のみに頼る、賛成せぬ各種の意見もある。

前の二少年の口振りでは、其發意は少年自身にあるらしく、後父兄が之を許可して出發したものである。元氣が好いではないか、此二少年に接して、予は平生の持論に關し、聊か心強さを感得したが、父兄教育者の指導も一般に此邊に留意されて欲しいものである。

青年者流にあつては、山岳會等の鼓吹によつて、近來登山熱、遠足熱が加はつたやうであるが、予は寧ろ少年時代から適當なる心身の鍛練に資する此種の事をやらせる必要を主張するものである。

序でに言うて置くのは、山地に育つた者は平地に育つた者に比し、體格は小さいながらも逞ましく、筋肉は堅硬である。殊に背負うて物を運ぶ慣習から背部の筋肉が異常に發達してゐるのがある。性質からいふと、勞を厭はず、堅忍持久は其長所であることである。

結婚問題

一般の家庭から見ての結婚問題につき、近來色々新らしい説をなす者もあるが、軍人の家庭を作ることに對し、此等の新説を眞に採用する譯には行かぬやうに思ふ。

昔の家庭、殊に士人の家庭は如何に編成されたものであるかを見んが爲めに、參考として諸書を涉獵した結果、次の様である。

一 妻縁を結ぶに入念すべし、是又近代は容色の美醜を選んで、筋目に強て不構は、濁世の人情淺間敷事なり、古語曰、

妻者一の撰器、妾は不撰形、

媒妁の言を不可信用、用女の近邊へ手筋を以て開合べし、兩親へ孝不孝、家來へ仁不仁、舉質寛急の事、素を好か、また花麗を好か、是等の品々能聞届け、容色の所は不及聞届、只血筋と器とを可撰事なり。

一 妻縁極り入嫁して、正式の祝儀相濟、閨に入て枕をかはさぬ前に、妻に向ひ申聞せ、その返答可聞事は、

今日より兩親の腰もとゝ存候て、委細用事を達べし、

内縁を頼て外より申來るを取次まじき事、

手前召仕の男女に、親疎の依怙有間敷事、

産神詣先祖墓參りの外は出まじき事、

衣装に風流を好まず、質素に行跡可有之事、

遊藝を好で藝者を招くまじ、

素生上戸たることも禁酒すべし、

某無理を云とも、當座に憤り言の答有まじ、

右之品々相守るべきやと聞て、右の内一事なりとも心得なきと見えば、枕をならべず、その夜中離別し、親元へ返す、一夜もとめ置は非強なり、

一 妻を離別するに五離の法有、聖徳太子定め給ひし掟なり、

狐臭あるは懷妊せざる内に離別すべし、出生の子に傳るなり、

舅姑に不孝ならば去べし、

石女ならば妻を抱、出生せんとするに嫉妬せば去べし、

酒宴遊興を好み、遊山するを異見しても不止ば去べし、

手前下女下男に親疎あらば去べし、

一 我心に不應とも、離別ならざる四不離の掟あり、

家督の男子を産たる妻は離すまじ、

兩親の病中能介抱し、終りの先途を見届たるは去難し、

夫不行跡か主人へ不忠有を、身命を抛て強諫するは去がたし、

儉約を守り、家來男女も下女を承伏し恐敬するは去がたし、

(以上山本道鬼入道百目錄開書より)

一 古語に、孝は妻子に衰ふといへるごとく、今の世に、さばかり父母によく事ふると見えし者の、妻子にひかれて、うとくなりゆくおほし、いにしへも此等のものを、倚門親の望疎にして、結髪妻の情あつしとそしれりの望疎にして、結髪妻の情あつしとそしれり

(蟠龍子長秀武士訓より)

一 妻を娶は、其娘夫の氣にあふべきもの、詞すくなくおとなしきものをえらみめとるべし、金銀威勢にかゝわらず、末長き了簡を專一にすべし、されば昔の教にも、娶に五のどらざる有と、逆家とて家に道徳なく、さかさま事の多き家の女は娶らず、亂家とて人倫を亂し、おさまらぬ家の女は娶らず、世々刑人有とて數代罪をおかし、仕置などに合たる家の女は娶らず、世々惡疾有とて、代々惡しき病の有家の女は娶らず、喪父長子とて、後家そだちの女は娶らずと、なん、是等は當時富貴威勢ありとも娶るまじき事なり、又妻に七の去ありと、父母に従はざる者は去る、無子者は去る、言葉多き者は去る、盜する者は去る、是等は疾くに去らざれば禍の本なり、されども無子者言葉多き者は、外に惡き事さへなくば、去らずともしかるべからん、

(手島宗義子弟訓)

一 天に陰陽あれば人に夫婦あり、陰陽和合して萬物を生育す、天人一理と知べし、然るに陰陽は倡隨とて、陽はさきだつて陰を倡ひ、陰はおくれて陽

に隨ふ、是又自然の理なり、其理によつて夫婦の倫を定むる也、されば夫は別正とて、つよく正しき徳を以て、常に婦をいざなひ、假にも容色にまよふ事なし、婦は貞靜にて、一筋に靜なる徳を以て常に夫に隨ひ、いさゝか寵愛にはほこる事あるべからず、但その簡要をいは、夫婦は和らぎ睦しき中に、男女の差別あるを本意とすべし、男は外をおさめ、内さまの掟を好まず、女は表向の事をいはず、たゞ内外の差別みだりならざるをよしとす、然故に、聖人夫婦の間においては、別の一字を不易の法と定給ふ、

(室直清五倫名義より)

一 夫婦は子孫の相續く故にして人倫の始也、夫は婦に禮義正しく、婦は夫に和順なるべし、然るに馴したしむにまかせて、敬と和とを失へば、其道たゝす、婦人は多くは愚なり、道にたがは、教へ正すべし、怒るべからず、怒れば和を失ふ、

(貞原篤信初學訓より)

一 妻を求むるには其性行のよきと、良家の女とを選ぶべし、其人品のよし

あしと家法の善悪を選ぶべし、人の子は父よりも母によく似る理あり、故に其心の賢愚も勇怯も、多は母に似る例あり、勇者の女子の生める子は勇あり。

(頁原篤信家道訓より)

一 武士が町人の金銀澤山に持ちたるを見、入簾になる事不覺なり。

(馬場美濃守不覺の十六ヶ條より)

一 嫁を權門豪商に索め、又資産を目的に養子入婿とならんと欲するの風は我將校社會に流行を來すの恐れなきか。

(乃木將軍遺稿より)

結婚問題に關係した書籍は此外澤山あらう、予は此問題については、無暗に一二の經驗者に聽くよりも、確かな書物について研究する方がよいと信ずる少くもウカ／＼と逆上^{のせ}て結婚するよりも、何なりと書物について組織的に研究すべきを主張する、民法及戸籍法の當該條項は是非調べねはならぬ。

養子縁組に至つては、乃木將軍の養子論があり、特別の關係なき以上、予は武人として絶対に反對である。

組織的研

究

養子縁組

合理的の

やり方

婚姻に關して賛成の出來ぬ舊い習慣は、氣附次第、相互の妥協によつて、新しい合理的のやり方に更へる方が宜しいと思ふ、之には色々意見もあるが他日に譲つておく。

從 卒

從卒の使用は平時にありては、寔に有難きことである、決して將校が自己の特權を以て從卒を使ひ得るものと思ふてはならぬ、勿論部下として上長の命に従ふのを嫌ふものはあるまい、從卒の制なくとも、兵卒自身走つて將校の用務を便することは情義上成立せぬことはあるまい、併しながら全くの私用を役せしむる從卒ならざることを考へねばならぬ、隨つて從卒の使用は、其根本觀念に於て、將校の分別を要するものである、内務書に所謂「聯隊長ハ從卒ノ使用當ヲ得サル者アルトキハ其使用ヲ停止スルコトヲ得」とは從卒使用の根本義を反言的に示されたものである、此規定のあるのは却つて怨めしくも思は

將校の分

別

れるのである。

全く家人の當然爲すべき事に迄從卒を使用することに就て、色々問題の起つたことがある。水を汲んで風呂を焚かせる、子守代理を言附ける、臺所の物迄買物にやる、細君の背まで洗はせる、此等に至つては使用の範圍を脱逸してゐることは、常識判斷上議論の限りではあるまい。勿論之は將校其人の發意ではなく、夫人であるとか、譯の分らぬ家人が忙しさに紛れて、遂頼むのと、從卒も氣をきかした積りで、イエ私がやりませう、造作もない事ですからといふ調子で格別氣にも留めずに、寧ろ進んで其勞役に就くといふことから來るのであらう。狀況は然りであるが、決して從卒の任務上看過すべきでない、即ち假令將校の發意はなかつたにせよ、最初よりの分別に於て缺くる所があるのは免るべからざる科である。

先づ第一に從卒には其任務の範圍を限定して示すの必要があり、夫人始め家人一同には、從卒の成立ちを説いて置くべきである、將校の思慮分別は當然

斯く行届かねばならぬものである、斯くすれば如何しても前述の如き誤用を來す筈はない譯である。

仕事の範圍が定まつて居るにした處が、決して私一個の召仕でないといふ觀念を去つてはならぬ、随つて其勞苦を謝さねばならぬ、舊軍隊内務書の從卒に對する月々の手當を廢せられた所以に想到すると、謝意は精神上のものと成るので、將校及家人の從卒に對する心組に於て、之を召仕視せぬは言ふ迄もなく、一々其勞苦に對しては感謝の念を以てし、尙種々の便宜を與へてやるのが至當である、吞氣な將校は知らぬ間に、從卒が軍刀拭ひの布や靴墨などを自辨し、甚だしきになると洗濯屋の仕拂其他小用は從卒の自腹を痛めてゐることがある、又冷淡な者は從卒を使用し、用事をさするのを命令と心得、若し其意圖を察するに敏ならざるときは、之を叱責し、一體貴様は氣がきかん、馬鹿など、聞くに堪へぬ言辭をさへ弄するものがないでもない、此等は没分曉漢たるのみか、將校其人の品性の如何を疑はしめるものと謂ふべきである、又謝勞は

精神的のいたはりとも謂ふべきもので、往々從卒を連れて芝居見物などの慰安方法を取る向もあるやうであるが、これは全く不賛成である。從卒には自然、將校家庭及生活の内面を暴露することに就て、氣を留めねばならぬ點があらうと思ふ。何も將校の暮向きについて、隠し立をする必要はあ
るまいが、氣を附けずに居て、飛んだ内兜を見透かされるのは、決して賛成すべき限りでない。彼の從卒同士が將校家庭の批評を試み、延いて他の兵卒へ口から口へと傳はり、將校の内幕を中隊中に曝けて、物笑ひ、蔭口の種を蒔くこともないとは言へぬ。其邊の所は仔細に考へると思半ばに過ぐるであらう。精神教育の源泉たる將校は瑣細のことにも氣を配つて、對部下の關係を、缺陷なく築き上げねばならぬ。

兵卒中、從卒たらんことを志望してゐるものは存外少くない、之は諸種の事情から來るので、善い方面から推察すると、第一名譽であり、又自己の世話になる上長の爲めに働いて進せやうといふ事に歸着するやうであるが、悪い方面

の觀察から行くと、上官の爲めに働いて御引立を蒙らう、外出が殆ど毎日出來る、随つて、自由を有する身分となり、私用も足せる、之を口實に郷里から色々強請る材料にもなる、又班内では謂ふに謂はれぬ誇りがあつて、之を利用して戦友又は初年兵に自用を依頼する風が起り、反對に外出を利用して人の頼みも聽いてやる、良くない者になると夫で口錢的のものをせしめる都合の好い事もあらうといふものである。

以上存外な心理が横たはつて居るので、概言すれば從卒は苦痛所か、一種の權威であると思つてをるのがある。

之から歸納して來ると、從卒になるといふやに氣をきかせるやうになり、物使ひが積み、贅澤になり、果ては悪い事を巧み、不行跡に陥るやうにもなることを掛念すべきである。

從卒になると時間で以て單獨行動を取るといふことから、大概早速時計を求め、被服類も汚くては體裁が悪いとあつて氣にして、沓下、手巾などは第一

に奇麗なのを身に附ける、之が情性となつて在營間費澤な風習を續ける様にもなる。

外出して自用又は他用を辨じ、若くは飲酒漁色の惡弊迄附ける例もないことではない、恐るべきではないか。

從卒の任務を説示すと同時に、最初より此等の弊害を未發に防ぐことに意を用ゆることは實に必要である、若き士官が、只あの兵は元來眞面目だからと信用してかゝつて、任かし切りにしてゐる間に飛んでもない失態を出かし、後から然うかど氣が附くことは往々ある。

中隊長、特務曹長の從卒になると、殊更得をするとか考へるのは人情の弱點で他の下士卒も此眼を以て見るのは自然である、心すべきであらう、中隊附將校等にしても御多分に洩れぬ私事に働いた爲めに、公けの成績を有利に見て特典を與へるのは公明を缺くものである、固より從卒は學術科に於て一塵優れてゐる者を採用するのであるから、素質が既に劣等ではないが、從卒採用後甚

しく依怙の沙汰に流れるのは戒むべきである。

戦時に於ける從卒の忠勤した例は、數多の人の實驗又は見聞した所である、將校の從卒に對する思ひ遣りと仕打によりては、人生意氣に感ずとの感銘心が起り、身を以て之を報ずるの美談を飾成すことのある、然もあるべきであらう、恩義を施すのは敢て取るべきではないが、將校の慈悲仁愛が結晶して、微妙なる自然の感化を與へるに至つては、至高至美と謂ふべきだ。

從卒の使用は仰々しきことでもないやうに見えるが、熟々思ふに、事社會問題に接觸し、直接には軍隊の風紀問題に關係するのであるから、輕視することは出來ぬ、此章を草した譯合はやがて其處にあるのである。

軍神の詩歌

予は此書を完稿せんとするに當り、諸彦と共に軍神の詩歌を味はつて見やうと思ふ、軍神が折に觸れての吟詠も後進を激勵し奮起せしむる好個の教訓

となつて遣つたことを思ひ、吾人は襟を正して之を吟誦し、其遺志を體すると同時に、軍神が何が爲めに貴き最後を遂げられたかを忍び、一層 陛下御稜威のある所を感銘し、聖代の萬歳を祝ひまつらねばならぬ。

しこ草の茂れる中に紅の

色もさやけき大和撫子

先づ乃木將軍の吟詠から始めやう。

此歌をよみて將軍は日本民族の特色を言はれたのである、神州正氣の存する所を舒張したいとは將軍の一生念頭を去られなかつたことであらう、次の歌に對照しても分る。

仰き見れば心も空にすみ渡り

朝日てりそふ富士の神やま

敷島のやまと心の歌よりも、富士の靈山をとつて來て、純潔無垢の心をうたはれたのを大きいと思ふ。

指揮刀閃破曉雲、競進兵如狂浪翻、

立馬判功山上見、先鋒既入李花村、

西南役當時の作、少佐時代の若い氣分が生々として見えると共に、將軍の雅懷を窺はれたのである。

恰是清明節、滿城無不花、

皆言米價貴、到處醉人多、

將軍の五言絶句は此外餘り無いやうである、此詩は何處かの園遊會場での作であらう、結句で米の高い々々といふ傍ら、働かずに遊惰に陥つてゐる人共を諷されたらしい。

さみたれに物みなくちてはてやせん

鄙も都もかびの世の中（美にびは華）

でも將軍の時勢を慨いてをられたのが忍ばれる。

武夫は玉も黄金もなにかせん

いのちにかへて名こそおしけれ

に至つては將軍の眞面目であらう、武人が死を惜しみ、金を愛くしむやうになつては、世は末である。

肥馬大刀尙未酬。皇恩空浴幾春秋。斗瓢傾盡醉餘夢。

踏破支那四百州。聞說九州山水奇。鐵蹄欲踏上春時。

征途若過梅花地。折得贈君一兩枝。

將軍の征途に上らるゝ時の意氣と得意とが目に見えるやう。

稀有揚柳無竹梅。滿洲風物又奇哉。

飛雲塞下尙冰雪。何日東風渡海來。

將軍の風流、此一詩を見ても奥床かしい感じがある。

山川草木轉荒涼。十里風腥新戰場。

征馬不前人不語。金州城外立斜陽。

有名な詩、南山戦後の詠、鐵血の著者故猪熊敬一郎氏が日露戦役最中内地へ

歸つて來た時、予に此詩を示して、戦地の狀況正に此通りで、復また加ふるなしと説き、更に將軍當時の感懐について述べられ、尙支那人が此詩を讀んで大に感じ且詩の上乗だと評したことを語られた。猪熊氏は正に鐵血式の熱誠家であり氣昂れば卓を叩いて慷慨悲歌した人であつて、予は氏に敬服してをつた點が少くないことを附加へておかう。

有死無生何足悲。千年不朽表忠碑。

皇軍十萬誰英傑。驚世功名是此時。

は旅順攻圍軍中、士卒を勵まされたもので、將軍自ら決心の覺悟も、言外には

の見える。又、

爾靈山嶮豈難攀。男子功名期克難。

鐵血覆山山形改。萬人齊仰爾靈山。

に至つては有名なもので、此詩を作つて一戸閣下に示されてから、命名について物議のあつた二〇三高地が爾靈山となり、今や旅順の地圖は總て此將軍

命名の三字で記されてある始末、實に何とも言ひやうのない適當の命名である。將軍の一詩以て該高地に眠れる勇士の靈を慰め得て餘りあらう。吾人屈托心の起つた時、試に此詩を高吟せんか、直に心の雲を一掃することが出來やう。

東西南北幾山河、春夏秋月又花。

征戰歲餘人馬老、壯心尙是不思家。

予は此詩が如何にもスラリとしてゐて、長身瘦軀の將軍が戰場を往來してをられた風丰を聯想し得らるゝと思ふ、いゝ詩である。

開圖圖上幾多山水舊相識、拔劍斫空無數惑星向北流。

斗酒傾來遺悶結成殘夜夢、馬蹄蹂躪雪城氷砦黑龍州。

豪岩の調

王師百萬征強虜、野戰攻城屍作山。

愧我何顏看父老、凱歌今日幾人還。

將軍の美はしい人格が遺憾なく現はれてゐる軍司令官として凱歌して功

を矜らず、何の顔あつてか戦死軍人の父兄に逢へやうと述懐される所、廣大無邊の情合が人をして泣かしめずは已まず、旅順忠死者の遺族が却つて有難涙にむせんだのも無理のない次第である。

思ふこと語り盡して歸る夜は

空にも月はまごかなりけり

之は將軍が寺内閣下に贈られた歌で、殉死の大決心を暗に示されたものである。真如の月の影清く、崇高なる人格によつて萬世を照された將軍の徳は、月明の天の如く大きくほがらかなものであらう。

將軍奉呈の辭世の歌は日本國民として知らぬものはあるまい、語るも聞くも涙の種である。

次に橋中佐の歌を御紹介しやうと思ふが、予寡聞

咲きにほふ花も嵐に堪えてこそ

あじある實をば結ぶなりけり

の一首を知れるのみ。

此詠は實に中佐の覺悟を言現はされたもので、自ら言はれた通り、眞に立派な實を結ばれたのである。死場處を擇ぶといふ武士の心事も思はれて、三誦尙措かぬ歌である。

廣瀬海軍中佐の詩歌では、正氣歌と閉塞隊出發前後のもの、共に人口に膾炙されてゐるから、爰には餘り知れてをらぬ二三首を掲げてみよう。

三横赤道圈。二入南溟頭。夢魂慣風浪。海上換葛裘。經歷有未洽。半生空優遊。前途自遼遠。斯志何日酬。慷慨彈長劍。秋高兩半球。

之は入南球と題し、比叡艦に搭乘して遠洋航海中に作られたものであるが、中佐平生の負けじ魂が見られると思ふ。

舷頭回首水茫茫。一萬三千航路長。男子生涯君識否。滄溟到處是吾鄉。

次韻の詩である、海上生活の氣分が味へる。次のものと對照して見ると尙更

好い。

洋心一碧水如天。時見亂雲頭上懸。叱咤收帆聲未畢。狂飈送雨捲船舷。

以上駄辯を以て軍神の詩歌を瀆したこと恐入る次第である。總て軍神の詩歌を見るに當つては先づ其精神氣魄に透徹せねばいかぬ、字句の巧拙は云々すべき限りでない、併しながら平生此雅懷あり、思ひを詩歌に吟詠されたのは武人として欽仰すべきことである、而も閑つぶしの風流韻事ではない、終始一貫した心身鍛練、努力の修養を窺がはしむるものと思ふ。是等の詩歌を味つて、扱軍神の最後を考へたならば、嚴かなるものが吾人の胸臆を充たすであらう。

若き士官へ終

此書、色々の人から種々なる意味に於ける評點を施されたるを感謝す。

大正三年十一月十日印刷
大正三年十一月十五日發行

若き士官へ奥附

定價 金七十五錢
郵稅 金八錢



發行者
著者
印刷者
印刷所

東京市赤坂區表町二丁目一番地

伊藤芳松

東京市麻布區三軒屋町三十三番地

石井淳

東京市麴町區下六番町十七番地

松澤珩三

東京市麴町區下六番町十七番地

同 勞 舍

電話番町三六九番

東京市赤坂區表町二丁目一番地

電話新橋二六〇五番
振替貯金口座三〇九八七番

兵事雜誌社

◎發行所

●全部出版完成急告!!!
 祝完成ノタメ此際申込者ハ凡
 テ郵税ヲ不要又月賦拂込不苦

改陣中要務詳解 全拾冊

體裁判製本
 製クローリス金
 字入紙數各三百
 五十八頁正價一
 冊金八十五錢內
 地送料八錢

戰局ハ益々擴大セラレ東亞ニ南洋ニ今ヤ到ル所旭旗翻陣中要務ノ研究蓋シ斯
 翻ヲ見ントシ軍事ノ必要刻々ニ増加擴大セラレントス
 秋ヨリ急且ツ大ナルハナケン
 ニ基ヅク一大詳解ノ刊行ヲ企ダテ斯界ノ一オ
 シテ着手以來茲ニ十有餘
 旬、豫定ノ期ヲ違ハズ
 全部十卷 殆ト四千頁
 明快説明ノ懇切叙述ノ精細詳緻ニシテ改正ノ主旨
 ト理由トヲ知ルニ於テ些ノ遺漏ナキコト等ハ大方諸賢ノ夙ニ了知セラレ
 ヲ違ハズ願ニ因ルモノナリトシ感謝ノ念切ナルト共ニ本社獨特新ノ光榮トシカ
 ニ以テ誇リト爲スモノナリ希ハクハ一本ヲ備ヘテ時勢ノ進運ニ後ルハ勿ランコトヲ

發行所 電話新橋二六〇五番 東京赤坂區表 町二丁目一
 振替貯金口座二〇九八七番 東京赤坂區表 町二丁目一
 兵事雜誌社

研究會 著 ◎訂正第二版發行

新陣中要務令對照研究 全

(附改正理由)

體裁 菊版
 頁數約五百頁
 全一冊
 金七十五錢
 郵税金八錢

青島攻圍戰ハ今ヤ正ニ酣ナリ而シテ我陣中要務令ハ新タニ公布セラレタリ苟クモ職ヲ我陸軍ニ奉ズ
 ハ速ニ之カ改正ノ要點理由等ヲ明ラカニシ
 キヲ期スルト共ニ刻下焦眉ノ急
 ニ迫レル實試ノ機會ニ應用シ
 テ或ハ後ル、ナカラシコトヲ期セラレベキヤ勿論
 ナリ本社茲ニ見ルアリ曩キニ斯界ノ「オ」ソリチ「タル」研究會ニ囑ス同會特有ノ地
 位ト識量ノトヲ以テ編纂セラレタルモ如何ニ簡明精確、而カモ微
 闡キ細ヲ餘サ、ルニ於テ時運ノ要求ニ合セルカハ
 若月ニシテ再版ヲ發行スルニ至レルモ之ヲ知ラレバシ希ハクハ一本ヲ購求セラレテ此言ノ信
 否ヲ判セラルト共ニ之ヲ實際ニ運用スルニ於テ此千載一遇ノ好機ヲ逸スルナカラシコトヲ

◎發行所

電話新橋二六〇五番
 振替貯金口座二〇九八七

兵事雜誌社

東京市赤坂區表町二丁目一番地

兵書界の革命的命的大好評書

◎兵書界の革命的新刊!!
 研究會著 ◎發行早々大好評を博し忽ち第四版發行

戰略戰術詳解

體裁菊版頁數各册
 約三百頁前
 製本本製金文字入後
 全七册各一册金七十五錢
 正價 郵税金八錢

研究會の斯界に於ける地位は今更喋々陸軍大學出身者にして樞要なる職務に従事し
 するを要せずと雖も其會員の大多數は陸軍大學出身者にして樞要なる職務に従事し
 實施學校の要職にある者なることは既に讀者の熟知する所なりと信ず。又本社は曩に此
 大公刊する所の「戰略戰術詳解」は研究會が我國に良一年有半の歲月を費
 著なり。研究會員の奮勵と其高等學府の教官の熱誠なる援助とにより産出せられた
 に正確なるかは茲に贅言と某高等學府の教官の熱誠なる援助とにより産出せられた
 するを要せざるべし。其冊數も其の紙數も其の目次たるに止まらず之を世界の戰術書界
 に對比するも又以て誇りとすに日本の戰術にして大和魂 武士道の
 國粹を立脚するに足らざるなりは將帥より青年將校に至る迄苟も
 戰術を語るに足らざるなりは將帥より青年將校に至る迄苟も
 者には必ず之を其座右に備へざるも陸軍大學受験者年將校と云はんや
 べからずと信ず豈何ぞ必ずしも陸軍大學受験者年將校と云はんや

◎發行所

電話新橋二六〇五番
 振替貯金口座二〇九八七番

兵事雜誌社

御待兼の訂正大増補第
 十一版發行



體裁四六判半裁。頁數一千餘頁
 製本本製金文字入。附圖並箱附
 全一册 金壹圓 小包料金八錢

好評噴々版を重ねること第十二版に及びし本書が如
 何に上元帥より下下士に至るまで階級と兵科とを
 論ぜず指揮官たり幹部たる者に必須至便の書なる
 かを紹介せん爲め左に編者の自序を掲げ以て廣告
 に換ふ。

◎發行所

東京市赤坂區表町二丁目一番地
 (電話新橋二六〇五番)

兵事雜誌社

余ヤ不敏固ヨリ人ノ師長ヲ以テ自任スル者ニアラサレトモ俸俸
 ニシテ陸軍大學ノ門ヲ出テタルノ光榮ニ浴セルヲ往々青
 年將校諸子ノ推獎ヲ受ケ學術上ノ研鑽實業ニ贊同應答スルノ任
 ニ當ラン事ヲ懇請セラレタル之ヲ二三同學ノ僚友ニ問クニ亦同僚ナ
 リトイフ是ニ於テ吾人相圖リテ一個ノ打合セ研究會ヲ組織シ方
 今最先ノ急務トシテ屢々依頼ヲ受ケタル陣中必携ノ材料ヲ蒐集
 セリ其ノ範圍ハ固ヨリ軍事全般ニ亘リ原則ノ研究ニ應用作業ニ
 野外ノ實施ニ計畫施設ニ必須事項ハ悉皆之ヲ精細シテ遺憾ナカ
 ラシメントトナリ期セリ此ノ如キ事業ハ一人ノ力ヲ以テシテハ容
 易ニ功ヲ舉ヘ難キ虞アレトモ幸ニシテ數人ノ戮力ヲ得タル結果
 備置個領ノ失ヲ免ルルヲ得タルハ余ノ欣喜ニ堪ヘサル所ナリ。
 兩シテ當初ノ所期ハ勿論之ヲ世ニ公ニセントスルニアラハス以テ
 寫學ナル知己ノ懇請ニ副イントスルヨリ他意ナカリシガ兵事雜
 誌社主編マ之ヲ耳ニシ來リテ余ヲ訪ヒ之ヲ秘シテ僅ニ二三子
 ノ便ヲ圖ルニ止ムルノ理由ナキナリ且ツ熱心ナル研究者ガ千
 金ノ時間ヲ費シテ傳寫ヲ爲スノ徒勞ヲ吝ミ切之ヲ鉛筆ニ附シ
 フテ以テ廣ク同好者ヲ益セン事ヲ請フ余等其ノ事ノ意外ナルヲ思
 フト雖モ事公益ニ存ストセハ又強ヒテ之ヲ拒ムノ辭ヲ有セス即
 チ更ニ嚴重ナル選擇ヲ施シテ終ニ之ヲ公刊スルニ至レリ。
 終ニ臨ンテ余ハ表紙ニ刻セル徒歩計ヲ紹介セサルヘカラス是ハ
 千々和中尉ノ新案ニ成リ陸軍戸山學校ノ之ヲ採納セルモノ頃者
 噴々タル好評ヲ有ス本書ニ其ノ使用法ヲ附録セルカ故ニ讀者熱
 讀シテ之ヲ實驗セハ考案者ノ功績ノ偉大ナルヲ認ムルヲ得ヘシ
 即チ之ニヨリテ距離ノ測定ト距離ニ適應スル運動ノ計畫トヲ正
 確ニスルヲ得ヘシ余ハ陸軍戸山學校並ニ考案者ガ之ガ服膺ヲ寄
 與サレ本書ノ價價ニ一段ノ重キヲ加フルヲ得シメラレタル好意
 ナ感謝スル者ナリ。
 五月吉日 著者ノ一人識

研究會講話

戰術原則の由來と根源全

體裁菊判説明木版
七十餘個入製本本
製金文字入
全一冊金七十五錢
送料八錢

本書ノ非凡ノ價值アル事ハ世既ニ之ヲ知ル故ニ弊社ハ其價值ニ就キ嗚々スルヲ止メ唯ダ左ニ本書ノ
結構及内容ヲ紹介スルニ講話者ノ序ヲ以テス。

表現された用兵の原則は從來甚たしく單簡に取扱はれて居る然し此等の原則の本性を詳に知らんと欲
したなら、その産れた母體を知らねばならぬ、その母體を知り産れ具合を知りさうして後に始めてそ
の表現されて居る原則が眞に理解が出来ると謂ふものである。

さうして此の原則を眞に理解し、またその母體を知つて居ればその産れた原則の變化應用を間違ひな
からしめ得るのである。

それ故此の原則の母體と由來とを知ることは管にその原則を正當に理解し得るばかりでなくその應用
をもその變化をも正當に實施運轉し得るのである。

此理由て本講話を試みたのである序に謂ふて置くが此の講話を聴かれたら是を基として更に諸君の研
究を進め或は之を深くし又は更に諸君自身の所有物たらしめて欲しいのである。

大正三年二月

研究會講話擔當者

發行所

電話新橋二六〇五
振替貯金口座二〇九八七
兵事雜誌社

東京市赤坂區表町二丁目一番地

研究會著 ◎好評嘖々たる新刊

優勢軍ニ對寡弱軍之戰術全

體裁菊版説明木板
數十個入製本本製
上等本クロス金文字入
全一冊金七十五錢
郵税八錢

帝國ノ境遇未來ノ戰場ハ吾人亦之ヲ談ラジ然レトモ何レノ國ト戰ヒ何レノ土地ヲ戰場トナストモ吾人
ハ常ニ寡少ナル兵力ヲ以テ優勢ナル軍隊ニ對セサルベカラズ若シ夫レ寡少軍ハ常ニ優勢軍ニ對シ消極
的ニ作戦ヲナスベシト謂ハ、則チ止ム然レトモ斯レハ、帝國ハ如何ニシテ其發展ヲ
遂行シ得ヘキカト想フニ優勢軍ヲ以テ常勝軍寡少軍ヲ以テ通常一逼ノ戰
勝軍トナルハ誠ニ難シ然ルニ我帝國ハ此ノ困難ヲ排除ニ通常一逼ノ戰
略ヲ戰術トナルハ統帥ヲ以テ満足シ得サル所ナリ。

研究會ハ茲ニ見ル所アリ地位アリ其說ク所見ル某氏ニ囑シテ優勢軍ニ對スル寡少軍ノ戰術ヨリ軍ノ編
制等ニ就テ講話セシメタリ、今其文字ニシテ誠ニ本邦軍事界ノ一大光明タリ今本社其公刊ヲ許サレテ
然因果明晰近來稀ニ見ルノ快文字ノ月桂冠ヲ得ントスルハ必ス之ヲ讀破セサルベカラザルノ眞
之ヲ解シ實ニ本邦軍人ハ之ヲ掉ハ勝利ノ月桂冠ヲ得ントスルハ必ス之ヲ讀破セサルベカラザルノ眞
ヲ弄ズ又實ニ本邦軍人ハ之ヲ掉ハ勝利ノ月桂冠ヲ得ントスルハ必ス之ヲ讀破セサルベカラザルノ眞

發行所

振替貯金東京二〇九八七
電話新橋二六〇五

兵事雜誌社

東京市赤坂區表町二丁目一番地

!!刀利!!星明の界術戰

研究會 著 第一第二版賣切れ第三版發行

戰術難問題の解決

冊二全

陸軍大學ハ青年將校ノ登龍門ナリ苟モ其初一念ヲ貫徹セント欲スレバ必ズヤ其門ヲ叩カザルベカラズ然レドモ此事タル決シテ尋常一茶飯ノ談ニアラズ一度躡轉シテ起ツ能ハザランカ優勝劣敗ノ蹟ハ慘トシテ心神ヲ悼マシムルモノアリ是レ鞠躬盡瘁其及バザルヲ虞レシムル所以ナリ然リ而シテ大學入學試験中其最モ困難ナルヲ再審トナシ再審中最モ困難ナルモノヲ戰術トナス本社管テ研究會員ニ請ヒ再審試験難問題ノ解決ヲ兵事雜誌ニ掲グルヤ江湖ノ士督責懲慙シテ其大成ヲ促スコト切ナルモノアリ、謂フニ其事ノ緊要喫シテ其益スル所甚大ナルニ因ルベシ茲ニ於テカ本社ハ更ニ未ダ發表セザル難問題數十ヲ加ヘ詳ニ之ヲ研究シ時ニ再審試験問答ノ要領ニ擬シ以テ從來管テ見ザルノ懇切ト精細トヲ發揮セリ希クハ江湖篤學士ノ渴仰ヲ醫スルヲ努メタリ請フ一本ヲ備ヘテ人後ニ落チザル準備ヲ整ヘ其初一念ヲ貫徹センコトニ努力セラレヨ是レ本社私利ノ爲ニアラズシテ實ニ國家ノ爲切望ニ堪ヘザル所ナリトス

◎發行所

東京市赤坂區表町
電話新橋二六〇五番

兵事雜誌社

本發書本々早行發書本

研究會 著 好評嘖々たる第六版發行

決心問題と着眼點

體裁美頁數二百餘頁
全一冊 金五拾錢
郵稅六錢

研究會の出す所曩に「作戰綱要」あり。幾何も無くして「改正步兵操典詳解」あり。今又第三の研究として、茲に「決心問題と着眼點」を刊行するの榮を荷へるは、顧みて本社欣懐措く能はざる所なり。思ふに事物の成功する否とは、一に其の着眼の敏なると否とに由り、又決心の如何に關するや固より大なり。換言すれば、着眼宜しくして適當の判斷之に伴ひ、判斷適正にして其の决心果敢なるに於ては、即ち少くとも先づ先制の利を攫得するものと謂ふべし。軍事上の事亦何ぞ異らん。一勝一敗、興亡隆替の跡、古來の戰史は歴然として之を指示せるに非ずや。本書は即ち戰略上、戰術上、該二者の喫緊なる所以を述べ、以て各種の場合に於て、其の如何にすべきものなるかを縷述せるもの、もと陸軍大學受驗者、及特志者の爲に研究講話せるもの。今請うて之を刊行するに當り、本社ハ刊行上自ら其の「着眼點」及「決心」の當を得たるを悦び、江湖に對しても亦「着眼點」及「決心」の機敏且果斷ならんことを勸む。蓋し之を繕くと一日早き時は、研究上修養上、即ち自ら機先を制するものなればなり。豈敢へて售るが爲にのみ爾か言はんや。

◎發行所

東京市赤坂表町二丁目一番地
電話新橋二六〇五番

兵事雜誌社

晴 軒 居 士 著

戰術想定作爲法全

一冊金五十錢
郵税金四錢

想定の作爲の巧拙に因り被課研究者の研究の効益に其の差あるは勿論なり然るに想定は如何にして作爲すべきものなるや又想定は如何に讀むべきを至當とするやとの質問を受け答者も亦之が答解に苦しむとのことを屢々耳にし居りしに頃者某要職にある晴軒氏が二三篇學者の爲めに此の緊要なる問題を解決し與へたるを聞き馴せて其寓を訪ひ切に之が手記を請ふと雖も氏は其公開を許せられず論難數時に亘り予の語激して不親切者と呼ぶや氏は此の嫌惡すべき呼稱を厭ひ憤然として予に其の手記を投與されたり。

思ふに想定が如何にして作爲せらるるものなるやの疑問を抱くもの決して少しとなさざるべし本書は之を説明するに懇切を極め、情況に就き兵力に就き地形、地物に就き時間、時刻に就き將た出た季節、天候其他の素質に就き一々之を説明し或は記載の方法を擧げ或は具備すべき條件を述べ更に出現すべき問題に就て詳細なる研究に次ぐに此の提案の下になれる想定を例示し各場合に亘りて周到なる用意と懇切なる説明書を以てし加ふるに卷末に附するに分隊、小隊、中隊より諸兵連合の聯隊、旅團に至る迄の各場合の想定を以てし殆んど餘蘊なし且つ本書は常に想定作爲法を研究するに止まらず想定によりて戰術を研究する者の爲にも亦極めて必要なる説明を與へある等眞に近來の快著なれば其の教育者たるに研究者たるを問はず必ず一讀するの價値十分あり。

◎發行所

東京市赤坂區表町二丁目一
電話新橋二六〇五番 兵事雜誌社

大好評の新刊(第十一版出版)

研究會 著

改正歩兵操典詳解

卷の上
卷の下

體裁菊判 頁數二百五十餘頁 上下二冊 各一冊 金六十錢宛 郵税六錢

陸軍大學出身の某々氏等が同大學入學志望青年將校諸氏の懇請黙止し難く嘗て同有志研究會の請に應じ或は便しつづつ在るとは「作戦綱要」を手にする人の既に知り給ふ所ならん。然り、同研究會の成立や日未だ淺く其組織や向天下の俊秀を網羅せりとは言ふべからざるも、而も其研究總べて着實穩健にして世間多數者の渴望を醫するに十分なることは之を同書が既に第四版を重ねたるの盛況に徴すべし。今や「改正歩兵操典詳解」成る本書は即ち同會第二の所産にして某々氏等の他位たる蓋し改訂其の内容豫知に比較的便なりしが絶大の精力を以て討究を反覆し逐條各項に懇篤なる解釋を試講話したる其の筆記なり若し夫同に至りては訂正補修遺漏無からんことを期せり。故に其の解釋や曲詳密、其の說明や難問疑義未だ以て立ちどく氷解せずんば欲する諸君は直ちに一本を備へ其の歸趨を知られんことを。

◎發行所

東京市赤坂區
表町二丁目一 兵事雜誌社
電話新橋二六〇五番

◎見よ看よ好評嘖々忽ち第三版発行の本書を
研究會 著

改正野戰砲兵操典詳解

體裁 菊判
頁數 三百餘頁
正價 金七十五錢
郵稅 八錢

本書は讀書界に於て破天荒の大好評を博し未だ僅々
年餘にして版を重ぬること十回の盛譽を擔ひたる改正歩兵操典詳解改正野戰砲兵操典詳解、戰略戰術詳解等と同じく研究會の產物なれば、其の解説の精確なるとその講述の懇篤なるは今更改めて弊社が茲に喋々する迄もなく讀者は既に了知する所ならん、宜なる哉發行早々好評嘖々たり

東京市赤坂區表町二丁目一番地

◎發行所

振替貯金口座二〇九八七番
電話新橋二六〇五番

兵事雜誌社

研究會 著

改正野戰砲兵操典詳解

體裁 菊判
紙數 三百餘頁
全一冊 金七十錢
郵稅 八錢

改正野戰砲兵操典ハ發布セラル本書ガ最近大戦役ノ重要ナル教訓ヲ骨子トシテ改正セラレタル實典タルハ云フマデモナシ而モ條文ハ簡潔ニシテ意味極メテ深長之ヲ會得シテ其ノ神髓ヲ悟了スルニアラザレバ運用ノ妙ヲ得ル能ハサルナリ是ニ於テカ其ノ神髓ヲ味ハシムル詳解書ノ需用起ル曩ニ步兵操典ノ改正アルヤ幸ニ世人ノ敬仰セル某々有爲ノ將校特ニ會ヲ結ンデ之ガ攷究ニ從事セラレ研鑽頗ル力メテ敬仰セル業ノ大ニ天下ヲ益スベキヲ思ヒ切ニ請ヒテ之ガ公表ノ許可ヲ得直ニ印刷發行スルヤ世人ノ歡迎果シテ目覺シキモノアリ暮年ナラスシテ五版ヲ重スルニ至レリ今ヤ本操典ノ發布アリ大方ノ望マル所亦前ノ歩兵操典詳解ノ如キ良書ノ出版ニアルベキヲ思ヒ前著者諸彦ニ請ヒテ茲ニ前著同様ノ詳解ヲ公ニスル光榮ヲ荷ヘリ其ノ内容ノ新界ノ渴望ヲ醫スルニ足ルベキハ吾人ノ喋々待タズシテ明ナル所苟モ最新知識ノ獲得ニ於テ他人ニ一步ヲ讓ラザラント欲スル士ハ速ニ一本ヲ左右ヘ備ヘラレ

東京市赤坂區表町二丁目一番地

◎發行所

電話新橋二六〇五番
振替貯金番號二〇九八七

兵事雜誌社

好評第一版第二版第三版發行

研究會著

範例的想定 全

體裁菊判。紙數約百五十頁
三度刷隊形配布圖十餘枚入
全一冊 金五十五錢
郵税金六錢

再版忽ち賣切れ三版發行

數學には公理公式等ありて之を運用すれば如何なる難問題と雖も忽ち解決
應用戰術登條理系統なからんや茲に於てか研し得べし。
に何等の 戰術研究の公理公式と
なるべしと想定二十種を案出し 果を得たり因て其講本を 範例的

想定 命名し本社請ひを容れて本
想定 書を發行するに至りしものなり。
本書に掲ぐる想定は僅に廿素より少なしと
せず然れども此の二十の想定を研究すれば 他の多種多様の觀あり且つ復

雜混淆せる想定に對しても分析解剖必ず其の歸着
する所を發見するに足るべし 即ち 本書の價値は多言を要せず左
定理的想定! 範式的想定!

故に將來難局に處 去就を決し幾多の想定に對して正當
の解決を得んと欲せば先づ宜しく本書を繙れんこ
とを 本書は目下兵書界に於て「決心問題と着眼點」と好書なり。

◎發行所 振替貯金東京二〇九八七番
振替口座番號二〇九八七番 兵事雜誌社
東京市赤坂區表町二丁目
(電話新橋二六〇五番)

我陸軍教育之基準書!!

陸軍教育指針 全

體裁ポケット形用字六號
文字、紙頁八百餘頁
製本草製本金文字入
全一冊 定價金八十錢
小包料八錢

教育の諸條規に通曉することは教育を完全ならしむる基礎なり然るに其
必要なる條規は極めて多く到底之を諳熟する能はざるなり之を以てか成規を一
括して座右に備へ必要に臨み之を繙き以て諳熟の困難に代へざるべからず是れ本
社が特に教育に關する必要成規を網羅し之に内務其他分
離すべからざる成規を加へて敢て鉛型に附したる所以なり坊間曲範令に
關する此種の冊子少しとなさず其教育に關するものに至つて則ち本書あるのみ江湖の諸賢希くは一本
を其座右に備へ以て國家教育に遺漏なきを期せられんことを。

發行所

振替貯金東京二〇九八七番
電話新橋二六〇五番

兵事雜誌社

東京市赤坂區表町二丁目一番地

本書は發行早々大好評を博す

軍隊教育界空前の大著!!!

新教育令軍隊教育詳解

全二冊 上 下
一冊 金七十五錢宛
小包料八錢宛
製本本製總ク
ス金文字入
三百頁宛
體裁菊版頁數約

軍隊教育令は改正せられて茲に我が軍隊教育上に一新紀元を畫せり然れども
軍隊教育令は一の成文なり之が教育實施者にして至當に之を解し其の精神を
闡明して敢て戻ることなく其の指向する所に向つて努力するに非ずんば幾度
之を改むると雖も我が軍隊教育は決して大なる進歩發展を見ざるなり此の
故に事に教育に従ふものは之か研究に腐心し其の精神を擴充して軍國の爲め
に努力するに於て敢て遺漏なきを期せざるべからず我が軍隊教育實驗會は
夙に茲に感ずる所あり新軍隊教育令を研究し其の精
神を闡明し其の意義を擴充して本社に其の公刊を許諾されたり
我が軍事界は今や戰術戰略書を得るに難からず軍隊教育に關するものに至り
ては之を得るに苦む是れ本書の特に必要にして有益なる
所以なり敢て江湖篤學篤業の士に一讀を勸む

◎發行所

振替貯金東京二〇九八七番
電話新橋二六〇五番

兵事雜誌社

東京市赤坂區表町二丁目一番地

大好評初版賣切第二版發行

陸軍少將 野口坤之閣下校閱
陸軍歩兵大尉 三澤 活水殿著

中隊の家庭教育

體裁四六判紙數約百八
拾頁製本本製金文字入
全一冊 金四十錢
郵稅 金六錢

軍隊生活を以て一種の家庭生活たらしむる事は是れ内務書の命ずる所にして
我が國軍をして一層の元氣を湧出せしむる所以の源泉なり但し言ふは易く行
ふは難し日常の生活を如何にして此新理想に適はしめんか其の方法手段
に至りては卓越なる見識と緻密なる實驗とに須たざるべからざるものにして
一朝一夕に案出し得らるべきに非ざるなり本書は著者の熱心なる考察
と多年の經驗とを基とし其の蘊蓄を傾倒して記述せられ
たるものにして一言一句實際の必要に觸れざるものなく微に
入り細を穿ち悉く人を首肯せしむ實に軍隊家庭の慈父
慈母たり又嚴師畏友たる良書といふべし將校下士諸君
は坐右必ず一本を備へらるべし平生の疑團漠然として氷釋せらるる者あらん
東京市赤坂區表町二丁目一番地

◎發行所

電話新橋二一六〇五
振替貯金口座二〇九八七番

兵事雜誌社

陸軍歩兵大佐坂田虎之助殿譯述
研究會訂正増補

◎第四版◎

訂正増補 青年將校の職責全

體裁四六判
紙約三百餘頁製本
本製金五十錢
全一冊郵稅八錢

將校は軍隊の
槓幹にして
青年將校は槓幹の中堅、中軸なり中堅中軸堅
牢強固ならずんば槓幹破碎す、槓幹破碎
活動の本源なし、豈に自重し自尊せずして可ならんや然れども實質の充實せざる自重自
毒なり豈に誠節して修養せざるべけんや世に青年將校の修養に資するの書類尠きにあらざるのみ
多くは徳目を羅列して之を講述し理論を説明して強壓的に出て乾燥無味殆んど讀むに耐へざるのみ
深く其内容亦實際實事に痛切獨り本書は此弱點を矯め日常の處世
執務服業の眞諦に觸れ中軸中堅たる青年將校の修
養の要と規範とを示す痛切深刻なること坊間の群書と其比
くせず是れ敢て本書の購求を勧むる所以にして又翻刻にして公にする所以なり。

◎發行所

電話新橋二六〇五番
振替口座東京二〇九八七番
東京市赤坂區表町二丁目一番地
兵事雜誌社

軍隊教育實驗會著

模範的小隊長全

體裁四六判
本製金三十五錢
全一冊郵稅四錢

從來青年將校の職責を説けるもの少しとせず然れども徒らに理想に走り理論に陥り之を具體的に開陳
せしものなきは聊か隔靴搔痒の感なき能は青年將校修養の材料に資せしめんと
ざりしが本書は著者が嘗て之を遺憾となし青年將校修養の材料に資せしめんと
り廣く親し目睹せし五十人の模範的小隊長に就き詮衡
近なる實例を擧げ以て其職責の準繩を示せしものなり故に小冊子
難さ小隊座右銘、指南車なるべき好著借覽は寫取を申込む者
頻なりとの事を斯の如き有益なる書を一部人士の專用に委せんより之を公刊廣く全軍
ば青年將校諸士は以て向上發展の資に供し將校生徒諸君は以て
將來の目標を捉へ上長官進將校指導の参考とせられん

◎發行所

電話新橋二六〇五番
振替貯金東京二〇九八七番
東京市赤坂區表町二丁目一地番
兵事雜誌社

行發版再れ切賣ち忽版初

大正軍界ノ理想的事典出ツ

中隊家庭ノ慈母出ツ

理想的内務班長全

體裁菊版四十頁
數二頁餘
製本製金文字入
ボケツト形携帶至極便利
全一册 定價三十五錢
郵稅四錢

中隊家庭ノ慈母タル班長ノ職責ノ重大ニツキテハ豈此所ニ喋々ヲ要センヤ然レ共此困難ニシテ多端ナル職責ヲ明カニシ且ツ兵卒ヲ指導シテ慈母ノ大任ヲ果スヘキ方法ニ關スル記述ヲ見サルハ我軍軍界ノ最モ遺憾トスル所ナリキ本會ハ思ヒテ此所ニ致シ班長カ職責履行ノ各手段ト兵卒指導ノ方法トヲ理想的ニ陳述シ尙之ヲボケツト用トシテ携帶ニ便ナラシム而シテ之ヲ翻クニ至ツテハ一言一句中隊成績ヲ優良ナラシムル手段ナラサルハナク特ニ内務履行上其必用缺クヘカラサル嶄新ナル諸表十數種ヲ挿入セルカ如キ或ハ兵卒性行觀察録ヲ附シタルカ如キハ唯ダ其ノ一例ニシテ内容ノ豊富ト代價ノ低廉トハ眞ニ之レ大正兵事界稀ニ見ル良書寶典ノ理想タリ冀クハ熱誠ナル將校下士諸君ノ一讀ヲ惜マサランコトヲ

◎發行所

電話新橋二六〇五
振替貯金口座二〇九八七 兵事雜誌社

東京市赤坂區表町二丁目一番地

教育者と被教育者 全

體裁四六判
紙數約三百頁
正價一册 金五十錢
郵稅四錢

凡そ世に教育程ど難事なるものなし此難事の任に當る幹部は一刻も之が研究を忽せに爲すべからざるは今更茲に喋々するを要せざる所なり然るに被教育者の爲めには何々教科書、何々問答と稱する参考書數十種あれども尤も肝要を感じ尤も緊要なる教育者と被教育者との連鎖たるべき眞摯なる参考書に至りては未だ世に公にせられたるもの尠なし是れ頗る難事たるにあらざるなきか本書は著者が 多年の隊附勤務中に於て各種の教育に従事し教育者として又被教育者として知得せざるべからざる諸件を實地に就き研究したる事項を網羅し同好相會する軍隊教育實驗會に研究資料として提出し研究したる其研究録なれば實に得難き好参考書なり。

東京市赤坂區表町二丁目一番地

◎發行所

電話新橋二六〇五
振替貯金口座二〇九八七

兵事雜誌社

發行所 發行所 發行所 發行所 發行所 發行所 發行所 發行所 發行所 發行所

軍隊教育書界ノ革命書出ツ
鮫城生著

初年兵之教育手段全

體裁 四六版
紙數 二百五十頁
全一冊 金三十五錢
郵稅 四錢

從來兵卒教育ニ關スル著書其數ニ乏シカラスト雖モ新教育令ノ發布ト共ニ諸說多クハ陳腐ニ屬シ大正ノ今日之カ參考書ヲ見ル能ハサルハ最モ遺憾トスル所ナリ本書ハ實ニ多年軍隊教育ニ從事セル熱誠ナル著者カ新教育令ニ基キテ研鑽討究セル經驗上ノ好書特ニ中隊長以下各級幹部カ
教育手段方法及ヒ良兵良民ノ養成ニ關スル教育上ノ蘊奧ハ細大之ヲ網羅シテ餘サス理想的ニ陳述セリ某將軍評シテ曰ク「初年兵教育ノ好指南車ニシテ暗夜ニ燈火ノ感アリ」ト嘆賞セラル以テ本書ノ内容ヲ察知スルニ足ルヘシ乞フ教育監督者タル諸上官ト又其實行者タル各級幹部タルト苟クモ軍國ノ教育ノ進運ヲ企圖セラル、諸士ハ本書ヲ座右ノ銘トセラレンコトヲ。

◎發行所

電話新橋二六〇五
振替貯金口座二〇九八七

兵事雜誌社

東京市赤坂區表町二丁目一番地

發行所 發行所 發行所 發行所 發行所 發行所 發行所 發行所 發行所 發行所

新兵教育精神訓話全

體裁 四六版
紙數 約三百頁
正價 一冊 金五十錢
郵稅 金六錢

陸軍步兵大佐 高草木重列 殿校訂
陸軍歩兵中尉 佐々木保次郎 殿編述

◎好評嘖々たる新刊

世界ハ日本軍ノ批判ヨリ一轉シテ研究ニ移レリ、回顧スレバ明治三十七八年戰役ノ起ルヤ列強ハ我軍ノ矮身短軀ヲ憐ミ、其活動ヲ疑ヒタリキ、而カモ一戰又再戰砲煙蒙ノ問銃聲喧轟ノ秋ニ於テ笑ノトシテ赤土ヲ焦シ寒風凜冽トシテ白雪ヲ卷クモ平然トシテ其短軀ヲ驅リ毫モ疲勞困憊ノ狀ナカリシモノハ實ニ我日本兵ナリキ、列強ハ遂ニ嘲笑ニ武士道アリ、日本魂ヲ誓フテ憤慨難ニ越キタルヲ砲煙消エテ益ニ七星霜太平ノ夢ハ酣ニシテ驕奢華美ノ風里間ニ普ク、質實剛健ノ意氣頓ニ消衰シテ前途ニ樂觀シ得ンヤ。今ニシテ齟齬未ダ雨ラサルニ其窓牕ヲ膠セスンハ誰カク我ノ前軍隊教育ハ軍人ノ資質ヲ完備セシムルニアリ軍人ノ資質ハ至誠無二ノ精神ニ在リ、武技ノ習熟ニ在リ、無二ノ精神ニ在リ、然レドモ眞ニ戰勝ノ道ヲ開拓シ嶄然トシテ一頭地ヲ擡スル所以ノモノハ實ニ至誠シテ之ヲ軍隊ニ收メテ完全ナル軍人ノ資質ヲ備ヘシメントス教育者ノ苦心憂慮夫レ幾許ゾ。著者此ノ教育ニ任シ重大ノ責任ヲ自覺奮勵シ潛心思索シテ實管シテ自ラ深クハ今スル所アリ敢テ江軍隊並國民ノ教育ニ資シ借ニ俱ニ軍國ノ事ニ盡洋センコトヲ期セラレ湖同職ノ士ニ呈供シ軍國民ノ教育ニ資シ借ニ俱ニ軍國ノ事ニ盡洋センコトヲ期セラレ之ヲ篤學、忠職ノ士ニ頌ツ、本書ノ如キハ管ニ軍事教育ノ好旅伴タルニ止マラズ實ニ國民ノ寶典タリ是レ敢テ清鑑ヲ煩ハス所以ナリ。

◎發行所

東京市赤坂區表町二丁目一

電話新橋二六〇五番
振替貯金口座二〇九八七番

兵事雜誌社

IT3K-82

若林少佐著	海軍	生	活	全一册	〇・三〇
本社編輯	軍隊	生	活	全一册	〇・三〇
丸山著	鳴武	田中	尉	全一册	〇・三〇
那須合著	帝國	難	の	全一册	〇・三〇
本誌編輯	兵營	日記	の	全一册	〇・三〇
教育總監部	清國	動亂	史	全一册	〇・三〇
同	下士特別	漢文	教	全一册	〇・三〇
同	下士特別	地理	教	全一册	〇・三〇
同	下士特別	歷史	教	全一册	〇・三〇
本社編輯	清	韓	國	全一册	〇・三〇
第一師團	在	將	校	全一册	〇・三〇
同	在	軍	人	全一册	〇・三〇
本社編輯	近衛	步兵	第三	全一册	〇・三〇
第八師團	雪中	強行	軍	全一册	〇・三〇
相良大尉共著	進	化	せ	全一册	〇・三〇
	泳	教	育	全一册	〇・三〇

愛讀者諸賢に謹告す

本誌取次店に於て代金仕拂方延滞の向へは止むを得ず兵事雜誌及本社發行書籍の發送を停止すること有之愛讀者諸賢に對しては誠に不意に存候得共致方無之候然るに斯る場合に對しては實に他誌又は類似書籍を配達する者有之候に付其節は乍御手數に他誌へ御急報被下度本社より迅速に配達可仕候。兵事雜誌社出版部

發行所

兵事雜誌社

兵書は内外國何れの發行を論せず篤實を旨とし迅速廉價に取扱申べく候に付續々御用命願上候
 東京市赤坂區表町二丁目一番地
 電話新橋二六〇五番
 振替貯金口座二〇九八七地